

# 教化懇談会講義録

二〇二三年二月十七日

於北海道教務所講堂

# 目次

● 北海道教区教化委員長挨拶

……… 三頁

● 北海道教区教化本部長挨拶ならびに趣旨説明

……… 五頁

● 教化懇談会

## 《第一部》

……… 七頁

設問一【念仏申す生活について】

……… 七頁

設問二【真宗における組織の意味と教化本部の理念について】

……… 一四頁

設問三【組織のもつ危うさについて】

……… 二二頁

設問四【真宗寺院、真宗僧侶の本務について】

……… 二九頁

①【同朋会運動の願いや同朋会運動を現在どのように受け止めておられるか】

……… 三一頁

②【宗門・真宗寺院・教区の「本来性を回復すべし」とはいかなることか】

……… 三八頁

③【今、そしてこれからの真宗寺院、僧侶の本務とは何か】

……… 四三頁

## 《第二部》

設問一【教化本部発足当初3部門にかけられた願いとは】

……… 四九頁

設問二【教化本部のこれまでの歩み(課題)】

……… 五三頁

設問三【今後の本部に願われていることについて】

……… 五七頁

● 北海道教区会学事教務委員長挨拶

……… 六五頁

(前田総務)

只今より教化本部主催の教化懇談会を始めます。開会に先立ち、参加者の確認をさせていただきます。この度の教化懇談会でありませんが、黒萩昌先生、亀谷亨先生、金石潤導先生、中野誠二先生、学事教務委員長、伊藤秀様、錦秀見教化委員長、教化本部より、寺澤三郎教化本部長、並びに常任本部長、また北海道教務所より所員各位の皆様の参加をもちまして開催させていただきます。尚、任意におきまして、教化本部各部会の部会長・班長がウェブにて視聴参加させていただきます。宜しくお願い致します。それでは御本尊に向かひまして合掌ください。南無阿弥陀仏……真宗宗歌斉唱……南無阿弥陀仏、おなおりください。

### ○北海道教区教化委員長挨拶

(錦教化委員長)

失礼いたします。本日、教化懇談会が開催されるにあたりまして、先生方にはご多用のなか、ご参集いただいておりますことにまずもって厚く御礼申し上げます。宗門におきまして、宗務改革、いわゆる行財政改革と言われる課題が提起されまして、北海道教区におきまして、昨年の教区会議員協議会におきまして、北海道教区の将来構想検討委員会というものが立ち上げられたことでございます。その状況において、第八期の教化本部として、この教化懇談会という場を設けて、今一度教区教化にかけられている願いというものの原点を確かめつつ、この時代社会の中で何が大切なのかということを確かめようと思われ、本当に大事なことだと思っております。おもい返してみますと、私たちの宗門は、昭和三十七年に同朋会運動を発足させました。その同朋会運動によって、古い宗門体質との対峙ということの中で、教団問題ということが起こってまいりまして、それこそ宗派を二分するような、血の滲むような、いろんな混乱を経て、昭和五六年に新宗憲が制定されました。その新宗憲に前文が設けられましたのは、どこまでも教団、私たちの宗門が、何を願って依って立つのかということを明らかにしようと、三つの宗門運営の根幹が示されたことでございます。その中の「同朋社会の顕現」という言葉がございますけれども、実は前文の中では、「顕現」という言い方でございますけれども、本則の中では、宗派の目的は「同朋社会の実現」であるというふうに押さえられているということがございます。この「同朋社会」という言葉自体ですね、この同朋会運

動を通して生み出されてきた言葉でございますけれども、前文で言っている「顕現」というものと、本則で言っている「実現」ということの意味の違いは何なのかということ、私は常々考えております。昭和五六年の『真宗』宗憲改正特別号におきまして、この宗憲改正の願いということが語られる中で「宗門は宗祖聖人を自分たちの仲間のもので取り込んで、垣を巡らして、その中に閉じ籠っていく閉鎖集団でないはずであります。人類の親鸞聖人であり、浄土真宗でありましょう」という言葉、それから、「現代の社会に、原理と方向とを与えることにより、世界にこたえる教団の形成を急がなければならない」というようなことが書かれておることでございます。どこまでも、私たちは、この同朋社会と、同朋社会という言葉に込められた願いということ、この現代社会においてどう願っているのか、実現していくのかということ、絶えず確かめつつ取り組んでいくことが、私たちに課せられた教化というところに願われている大きな願いなのかなと感じております。同朋会運動と言われた時に、会を作るための運動なのかということ、その本質的な願いが矮小化してしまうのではないかということ、言われた先生がおられましたけれども、どこまでも、やはり同朋社会ということ、この現実社会の中に私たちはどう実現できるのかということとは、そこに生きる私たち一人一人の生活、在り方、そういうものが問われていくということだと思っております。北海道教区が、今日まで取り組んでこられた教化ということに対する真面目な姿勢というものは、とても大事なことであり、全宗門的に大切にその姿勢を受け止めてくださっている方々がおられます。そういう中で、北海道教区がこの時期に改めて教区の教化ということの在り方を問い尋ねようという取り組みは、本当に時宜を得たものだと受け止めさせていただいております。限られた時間でございますけれども、皆様方のお知恵をお借りいたしながら、この北海道教区の方角を見定めてまいりたいと思うところでございます。本日はどうかよろしくお願い申しあげます。

(前田総務)

ありがとうございます。

続きまして、第八教化本部長、寺澤三郎より一言ご挨拶並びに当懇談会の開催趣旨説明をさせていただきます。

## ○北海道教区教化本部長挨拶ならびに開催趣旨説明

(寺澤本部長)

失礼いたします。本日の教化懇談会に際しまして、黒萩先生、亀谷先生、金石先生、中野先生におかれましては、大変お忙しい中、本懇談メンバーをお引き受けいただきましたこと、改めまして心から御礼申し上げます。また、伊藤学事教務委員長様にも、大変お忙しい中、足を運んでいただきましたこと、ご隣席を賜りましたこと、改めまして心から御礼申し上げます。本懇談会の開催趣旨につきまして、お手元のレジュメ二頁に掲載しておりますので、まず開催趣旨を一読させていただきます。レジュメ二頁をご覧ください。

### 『教化懇談会開催趣旨』

北海道教区に教化本部制が発足し八期二四年が経過しました。これまで、累計約五二〇人が本部の役割を担われ、教区教化にご尽力されました。この度、教化懇談会を開催することにいたしました趣旨は以下の二点です。

- ① 北海道教区において、教学研究所並びに教化本部は、教学を研鑽し教化伝道の歩みに立つことを教区人一人ひとりに願って生み出され、今日までの歩みとなっております。それは両輪の如しと教えられてきました。真宗仏道に立ち続ける一人ひとりの求道者・念仏者・教区人の誕生がこの二つの僧伽から願われ続けているのであります。言うまでもなく現在の北海道教区内の寺院は、人口減少・過疎化・生活様式の変化・コロナ状況下において、多くの課題が山積した只中にあります。しかし、その課題を受け止める僧侶の感覚や感度はそれぞれです。このような時代の大きな過渡期にあつて、「真宗寺院の本務とは何か」を、「真宗僧侶としてその学びや歩みに願われていること」を、「今後の寺院・組・教区の教化伝道活動の視座や方向性」を考えていきたいと思えます。

- ② 八期二四年が経過した教化本部の歩みを多角的視点で点検精査し、現在と今後の課題を明確化していきたいと考えています。そのことよって、本年度から開始される北海道教区の行財政改革の協議に先立ち、教区教化の停滞を招かぬよう、教化本部として今後の本部運営の準備を進めていきたいと考えています。

以上二点を柱に据え、この度、教化本部や教学研究所の歩みに深く関わってこられた四名の先生にお願いをさせていただき教化懇談会を開催いたします。この懇談を通じて、現状に対する私たち一人ひとりの感覚や感度が確かめられると同時に、自らの危うさ甘さ、詳細な課題が具体的な言葉によって掘り起こされ、我が自覚となつていくことを願つてやみません。

以上、本日の教化懇談会の開催趣旨であります。本日は教化本部から常任本部員、各部会の部会長、班長も聴講させていただきます。この教化懇談会の中で、教化本部についての「これまで」を学ばせていただき、また「これから」を考える視座をいただければ幸いです。以上、ご挨拶と開催趣旨の説明といたします。本日はどうぞよろしくお願いたします。

(前田総務)

ありがとうございます。これ以降は具体的な教化懇談会となります。寺澤本部長の進行で教化懇談会を進めさせていただきます。

(寺澤本部長)

改めまして、懇談会の進行を務めさせていただきます。教化本部長の寺澤です。どうぞよろしくお願いたします。お配りいたしましたレジュメ等に沿いながら進めさせていただきます。まず、本日の教化懇談会の先生方をご紹介させていただきます。第三期、四期教化本部長、第一六期教学研究所有長を歴任されました、黒萩昌先生、第一四期、第一五期教学研究所有長を歴任されました、亀谷亨先生、第五期、六期、七期教化本部長を歴任されました、金石潤導先生、第一七期、現教学研究所有長、中野誠二先生、以上四人の先生方と懇談会をさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。懇談会の進め方を説明させていただきます。一、設問を進行が読み上げます。二、回答者は進行が指名します。三、回答後、意見交換をします。四、全体を二部構成で行います。二部構成につきましては、第一部、先ほど一読させていただきました開催趣旨①についての懇談。これを一六時、午後四時までさせて

いただきます。設問三までを終えた後、一〇分休憩。そして、設問四を懇談後、一五分の休憩を取ります。その後、第二部開催趣旨②についての懇談ということ、一七時四五分まで行わさせていただきます。記録方法の確認ですが、けれども、全文を録音させていただきます。北海真宗には、後日事業報告という形で載せさせていただきます。親鸞ウェブには文言の点検精査後、先生方にご確認ご承諾を得て、全文を掲載する予定です。また、本日の様子を動画で撮影させていただきますまして、一部を親鸞ウェブホームページに公開をさせていただきます予定です。以上であります。

それでは早速、第一部、開催趣旨①についての懇談を始めさせていただきます。第一部で開催趣旨①、真宗寺院の本務とは何か、真宗僧侶としてのその学びや歩みに願われていること、今後の寺院、組、教区の教化伝道活動の視座や方向性ということを念頭におき作成いたしました四つの設問をもとに懇談させていただきます。この度の教化懇談会の設問を考えるにあたり、歴代本部長が書かれました過去の教化研修基本方針を熟読いたしました。

そこには、その年に惹起している様々な諸課題を吟味し、それに応答していこうとする情熱的言葉が、時には激しく、時には静かに教区人に対して発せられているものばかりでした。そしてその言葉は、現在、教化伝道を担う私が今一度対峙し背負うべき課題として聞こえてきました。第一部の設問の多くは、その教化研修基本方針の言葉を元に進めていきたいと思えます。

## 第一部

### 設問一【念仏申す生活について】

(寺澤本部長)

それでは第一部の設問一といたしまして「念仏申す生活について」考えさせていただきます。二〇一二年度、教化研修基本方針の冒頭『念仏の声が聞こえない』これが真宗同朋会運動五〇年の私たちの足元、現状な

のでありましょう。』という金石先生の言葉が重く受け止められます。あらためてこの「念仏の声が聞こえない」とはいかなることかをお聞かせください。また、その上で真宗僧侶が考えなければいけないことをお聞かせください。この設問につきましては、まず初めに金石先生にお話をいただき、次に中野先生にお話をいただきたいと思ひます。お二人の先生方のご発言を受けて、その後、四人の先生方で意見交換という形で時間を持たせていただきたいと思ひます。それでは金石先生「念仏の声が聞こえない」そして、その上で「真宗僧侶が考えなければいけないこと」ということでお話をいただきたいと思ひます。

(金石先生)

失礼いたします。この「念仏の声が聞こえない」と発信させてもらったのは、二〇一二年度の教化研修基本方針であったかと思いますが、私が教化本部をお預かりしましたのは、二〇一一年度からでございます。教化本部をお預かりする直前に、七五〇回御遠忌が厳修されたことでありました。その厳修後、教化本部をお預かりするという最中におりましたので、どのように教化本部を考えていかうかということをお聞かせいたしました。そういう中で御遠忌が勤まりました。御遠忌にお参りされていた或るご門徒が、宗祖の七〇〇回御遠忌、つまり五〇年前です。七〇〇回御遠忌には御堂全体に地鳴りのようなお念仏の声が響いていました。ところが、この度の御遠忌は、お念仏は聞こえてまいりませんでした。こう寂しく語っておられたということが非常に教化本部をお預かりする直前に聞かせてもらった、ある意味厳しい言葉というか、そういうものとして聞かせてもらった時に「ああ、そうなのだ」と、同朋会運動五〇年を考えました時に、決してお念仏を離れた信心はないと薫陶を受け続けさせていたがながらも「ああ、お念仏の声が聞こえないのだな」ということを感じまして、こういったことを課題定義させていたがいて、教化基本方針に載せさせていただいたということが発端というか考えていく上でのスタートであったこととありました。しかし、それはただ、御堂全体に地鳴りのようなお念仏が聞こえていたのに、今は聞こえなくなったと、何かこう他人事のように、そのことを考えていくのではなくて、その時によく考えさせてもらったのが、その同朋会運動ですね、同朋会運動は、先ほど教化委員長も申されておりましたが、昭和三七年に宗門をあげてスタートをするわけでありますが、その一五年後、昭和五二年、いわゆる同朋会運動一五周年のところで、高史明先生が



記念講演をされているのでありますが、その時の講題が「念仏よ、興れ」であったと記憶しております。その講演で高先生は、このようにおっしゃるわけであります。「もし念仏がなかったならば、我々のようなものが救われる道はどこにもないのです。どうか南無阿弥陀仏の声が、大きな波のように全世界に響いて、ここに我々の救いがある、それを示していただきたいものです」こういう意味で「念仏よ、興れ」と叫ばれていかれたということでありました。当然、昭和五二年はですね、私は一〇歳でありますから、同朋会運動のことは全く存じておりません。後に、こういう講演がなされたということを知るわけですが、やはりその「念仏よ、興れ」という叫びをされていかれたということでありました。叫びという限り、そこには願いの深さが叫びとなっていかれたのだなということを思います。これを我にかえして考えていった時に、じゃあ自らの中に「念仏よ、興れ」という叫びがあったらどうかということが、思われてならなかったということがございます。そういう意味で「念仏の声が聞こえない」というのは、自らに問いかけるならば、自らに叫びはあるか、「念仏よ、興れ」という叫びがあるのだろうかという問いかけとして、私は考えさせていただいたこととございます。最近見つけた高先生の言葉に、自死を考えている若い子にこういう言葉で語りかけたそうであります。『世に苦が満ち満ちています。私とその若い子たちに生きてくれということとは、それらの子に届かないのです。「念仏よ、興れ」と、私にはそれしか言えないのであります』このように、満ち満ちている苦の隅々で「念仏よ、興れ」と、そのようにしか言えない。まさに、その高先生の叫びの中に問われるのは、自らに「念仏よ、興れ」という叫びはあるのだろうか、このことが思われてならないという中で「念仏の声が聞こえない」ということを私自らが考えさせていただいているということとあります。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。続きまして、中野先生、お願いいたします。

(中野先生)

只今、ご紹介いただきました中野と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど金石潤導氏が、北海道教区教化本部の二〇一二年度の「教化研修基本方針」の中で、真宗同朋会運動が発

足五〇年を迎えた私たちの現状を、ご門徒の「念仏の声が聞こえない」という言葉で押さえておられました。私はこれに言葉を付け足して、「念仏に生きている人の声が聞こえない」と受け止めたいと思います。ご門徒のこの言葉は、以前に厳修された大きな法要に比べて、今回の「宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要」は、念仏を称える声が聞こえなかったという嘆きなのだと思います。それは同時に、真宗大谷派なる宗門に生きる私ども僧侶に対する問いかけでもあるのでしょうか。仏語に聞きたずねることなく、文化的あるいは知識教養としての法話に終始して、念仏の教えに生きることを忘れてはいないか、というご門徒からの厳しいご指摘なのではないでしょうか。「念仏に生きている人の声が聞こえない」と受け止めるならば、「念仏の教えに生きている人はどこにいますか」という私たちへの悲痛なる叫びなのではないか。「門徒一人もなし」という悲嘆から真宗同朋会運動は起こりましたが、これも私どもに対する「あなたは、自分自身を門徒と言えますか」という厳しい問いかけなのでしょう。

しかし、念仏を申す声が聞こえたらそれでよし、という訳ではありません。特に宗祖がただかれた念仏は、「諸仏称名」「衆生聞名」ということを大切にしてきました。『一念多念文意』の中の「別解別行」（聖典五三八頁）について申し上げたいと思います。別解は、それぞれが同じく念仏を申しながら理解が別れることで、別行はそれぞれが別々の行いをする事です。特に宗祖は、「別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり。別というは、ひとつなることをふたつにわかちなすことばなり。解は、さとるといふ、とくといふことばなり」（聖典五四一頁）と述べておられます。さらに続けて、「念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆえに、別解というなり」（同前）とおっしゃいます。これは、念仏の教えを聞き学ぶ我々に対する、「あなたは念仏を申しはいるが、その内実はどのようなものか」という問いかけなのでしょう。

また称名について、「称は、はかりというところなり。はかりというは、もののほどをさだむることなり。名号を称すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念もなければ、実報土へうまるともうすところなり」（聖典五四五頁）と言われています。称名の「称」は当然「とこえ、ひとこえ」称えることですが、そこに宗祖は「きくひと」と註釈しています。

私はこれらのことを通して、ご門徒の「念仏の声が聞こえない」というご指摘を、「あなたは本当に念仏者として生きているのですか」、「念仏の教えを聞く者になっていきますか」という問いかけの言葉として受け止めたいと思っ

ています。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。「念仏よ起これ」という、高史明先生のお言葉を金石先生にご紹介いただきまして、「念仏よ起これ」というのはどういうことかなっていうことを考えていく時に、やはりその念仏の声を聞くことによつて、念仏に生きる人、私となつていく。しかし、今、念仏に生きる人の声が聞こえないということが、念仏の声を聞こえないということなんだということを思いながら、金石先生、中野先生のお話を聞かせていただきました。それでは、念仏に生きるということは具体的にどういうことなのかということ、意見交換させていただきたいと思えます。黒萩先生いかがでしょうか。念仏申す生活、念仏申して生きる、念仏に生きるということはどういうことかについてお聞かせください。

(黒萩先生)

そうですね、私自身はこの念仏申す生活ということについて一つのいたみがあります。若い頃、月参りの際に、後ろでお念仏申しておられるご門徒を前にして中々お念仏が出てこなかったんですね。そういう苦い経験があります。ただ、今中野さんが言われたように、念仏の音が聞こえたらいいのかという問題は一つ大事にしなければならぬと思うんですね。それは出す念仏なのか、出る念仏なのかという問題ですよね。如来の回向としてこぼれてきた念仏なのかどうかということです。蓮如上人の言葉を借りると、仏恩報謝のお念仏となっているのかどうかという事は、非常に重要な問題だと思います。

皆さんお聞きになったことがあると思いますが、専修学院の信國先生が、「わかってもらわなくても、念仏しなさい」ということを言われました。でも、本当に大事なのはその後の「そして、念仏から教えられていきなさい」という言葉です。これがなければほとんど意味のない言葉になってしまいます。

ここで蓮如上人のおっしゃる仏恩報謝の念仏とはどういうことなのかということが問題になって来ます。我々は先ず、生死巖頭立つということが大事なんだと思うんですね。そして「わかってもらわなくても」お念仏申して、本

願に照らされ宿業の身に目覚めつづけていく。そして、いよいよ「出離の縁あることなき」身を思い知らされた時、その時が『歎異抄』で言われる『念仏もうさんとおもいたつこころのおおるとき』なんですよね。「わかってもわからんでもお念仏しなさい」これは求道の出発点ですよ。苦しまぎれに出てくる念仏が、実はその人のご信心を問うてくる。自分の口から出てくる念仏に自分が問われてくる。そしてその念仏に育てられていく。そこに何か我々真宗門徒の仏道というものがあるんですよ。

ですから、私たちは金石さん言われたように「念仏が出てこない」ということを、やっぱり一つの大きないたみとしていかなければならないと思います。けれども、ただ声に出して念仏申していればそれでいいのかというと、それでは仏道を歩んでいるということにはならない。自分の申したお念仏が、今度は自分のご信心を問うてくる。そこに、求道の歩みと展開が始まっていく。こういうことはやっぱり一つ押さえておかなければならないのかなと最近特に思っています。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。亀谷先生、お願いいたします。

(亀谷先生)

亀谷です。よろしく願います。今黒萩さんが言われたことに全て尽きているのかなと思います。「念仏の聲が聞こえない」ということに關しては、私たち僧侶から念仏の聲が聞こえないということが一番問題にしなければならぬことだと思えます。業務用の念仏は出ますけれども、生活の折々に念仏をいただくということが失われているということですね。それはなぜかと言えば、おそらくですが、私たちに凡夫の自覚、愚者の自覚というものがないということがひとつあると思います。先ほど、中野先生もふれられましたけども、浄土真宗の称名は、「のぎへん」の「称」ですよ。諸仏称名の称ということで、どこまでも如来の呼び声を聞いていくという念仏です。その呼び声を聞いて、呼び声に導かれ、呼び声に教えられ、呼び声に育てられていく、これが浄土真宗の念仏ですね。対して、唱題目の「くちへん」の「唱」は、いわゆる自分の力で唱えるという、聖道門の念仏です。唱えた念仏の功德に

よって助かろうとする、中野先生は「別解別行」ということで押さえられました。この二つは当然別のものですが、私たちの中でそのあたりが曖昧になってきているんだと思います。つまり、念仏を称えたらなんとかなるという思いで、念仏をとらえているのではないかということです。その限り、念仏は私たちの救いとはならない。そこに、決定的に見失われているのは、凡夫の自覚、愚者の自覚ですね。念仏に育てられなければ、いかんともしがたい我が身であるということ、私たちが自覚していないということです。そしてもうひとつ言えば、念仏によって仏様は本願の心を届けよう、真に平等なる浄土の慈悲を届けようとして念仏を手渡されているわけですから、いわば本願がわからん、浄土がわからなければ、当然念仏申すということも、私たちには起こってこないということです。浄土真宗では本願や浄土を抜きに念仏ということはないわけですから、そういうことを自らの課題としない限りは、儀式の時にありがたそうに「南無阿弥陀仏」と称えても、また、念仏の声が起こっても、それは浄土真宗、親鸞聖人が伝えようとした念仏の救いにつながっていかないかと思えます。しかし、これも黒萩さんが言われましたように、そういう私たちを見抜いて「だから念仏しなさい」と仏は言われるわけです。そういうあなたたちだから、念仏でなければ助からないんですよと呼びかけているのが他力回向の念仏ということですから、そのことをどこまで自分の課題とできるかということが問われているのではないかと思えます。もちろん、「念仏の声が聞こえない」という理由は、これだけではないと思います。たくさん理由や背景はあると思いますが、しかし、「念仏の声が聞こえない」ということを問うた時に、それが浄土真宗の念仏ということに焦点を当てながら考えるならば、凡夫、愚者の自覚がない、そこに根本があるのでしょうか。そのことを見失って念仏の声が聞こえても、いわゆる先祖供養の念仏、鎮魂の念仏が盛んになっても、それは本末転倒だと思います。そういうことをお話を聞きながら思ったことです。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。先生方のお話を聞かせていただきながら思いましたことは、私は、先生方のお寺に伺ったことが何度かございまして、数日一緒に過ごさせていただいた時に、先生方が「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とお念仏申しながら生活されている姿にふれさせていただいたことがございました。その時、「ああ、私は、日常生活

活の中で念仏を申すことがなかなかないな」と思っ、それをきっかけに、生活の中で念仏申すことを意識的にはじめたということがあります。

今、先生方のお話を聞かせていただきました。そこに凡夫の自覚があるかとか、問いがあるかとか本願を聞いているのかとか、あなたは念仏申して、どのようにその声を聞いているんだっていうことを、なんかこう、私に聞いかけられたような気がしまして、そういったことを思いながらお話を聞かせていただきました。どうもありがとうございます。

それでは、設問二に移らせていただきたいと思います。設問二ですが「真宗における組織の意味と教化本部の理念について」ということで懇談をさせていただきます。二〇一〇年度、教化研修基本方針「同朋会運動五十年に向けて」の中で、黒萩先生は「組織というものが人を生み出す力を失った時、それは組織の死なのでしょう。私たちが身を置く北海道教区が人を生み出す力を失った時、それは教区の死を意味するのだと思います」という厳しいご指摘から、教区人の聞法、学習の意欲の薄れなどを含め、深い危惧の念を吐露されておりました。あらためて真宗における組織とは何か。また、教化本部という組織の理念について思うところをお聞かせください。まず、黒萩先生にお話をいただき、次に亀谷先生にお話をいただきたいと思います。その後、フリートーカーキングという形で意見交換をさせていただきます。それでは黒萩先生よろしくお願いいたします。

## 設問二【真宗における組織の意味と教化本部の理念について】

(黒萩先生)

そういうことを言ったのだということ、今改めて聞かせていただいたんですが、今もそのことは私の課題となっています。宗門には大谷派教師という資格がありますけども、その教師資格取得のためには、大谷大学・同朋大学・九州大谷短大・京都の専修学院・各教区に設置されている真宗学院に入学する、あるいは検定試験を受験するなど色々な方法があります。ただ、それがどのような方法であっても、大谷派教師を取得さえしたらそれだけでその人は求道者だと言えるのかという問題があります。大谷派教師の取得がそのまま求道者の誕生と言えるのか。

私はそうではないと思います。

私自身のことと言いますと、大学を出て自坊に帰ってきた時、多少真宗の言葉を覚えて衣をつけてお参りに歩いている、自分自身は実は真宗の教えもお念仏も全く必要としていない。だから、どうしてもお念仏が出てこない、そういうことなんです。資格だけもっていて真宗門徒とも言えない私が、どこで育てられたかと言うと、それは組であり、教区であり、宗門だったんですね。どの職場であつても人を育てていくのは現場の組織なのだと思います。私たちの場合であつても、大谷派教師を取つてそれでそのまま求道者ということではない。求道者たらんと歩みだした人間を、長い時間と手間をかけながら本当の求道者として立ち上がつて歩み出す一人に育てていくのは、組・教区・宗門という組織なのでしょう。

報恩講の布教に伺つた折に、広尾の伊藤篤先生が御礼言上で法中に言われたことが今でも思い起こされるんですよ。その時に申されたのは「私は同朋会運動の恩義の中を生きてきました。同朋会運動に育てられました」と。それはそのまま組・教区・宗門に育てられてきたということですよ。そうするとですね、組とか教区とか宗門という組織が人を育てる機能を失ってしまったらもう誰も育たないんだろうと、そしてその時宗門は一人の求道者も生み育てられない組織になるんだろうと、こういうことを思うんですね。

もう一つ言うと、もう二十数年、三十年近く前かなと思うんですが。当時同朋会館に行くと、全国各地から猛者みたいな人達が教導としていっぱい来られていました。その中で同朋運動にずっと関わつて来られた方にお聞きしたことがあるんです。それは、「同朋会運動が本当に盛んな時に、全国からこれぞという人材をこの同朋会館に引っ張つてきたんですか」と。「だから当時は同朋会館に多くの人材が各地から集まつて来たのですか」と、こういうことをたずねてみました。その時、その方が私に答えて下さったのは、「そうではない、同朋会館という器に入ったら、どうしても学ばずにはおられなくなるような空気が同朋会館全体に流れていたんだ」と。こういうことなんです。ね。そうすると、私たちの北海道教区というものが、大学を出て専修学院を出て、検定を受けて、教師の資格を取つて帰ってきた一人いちにんを、長い時間と手間をかけて、本当の求道者に育て上げていくような空気を持たなければならぬんです。

そして、そういう空気を作るのは誰かと言うと、それは今現に教区で衣を着ている我々一人ひとりです。教区全

体で何か新しいことをしたら、こういう空気が生まれますというような話ではないんですね。そうではなくて、教区に関わっている我々一人ひとりが求道者として立ち上がっていく。そういう求道者が一人二人と増えていく中で教区の空気が変わっていく、それしかないんでしょう。その空気に新たに教区に帰ってきた人間がふれていく、そしてやがて求道者として立ち上がり歩みだしていく、そういう展開ですよ。そういう空気が教区全体にだいたい薄れてきたなということを感じています。私自身振り返ってみて、色々な先輩たちの厳しい言葉に触れながら、何とかその言葉にかじりついてここまで育ててもらってきたなという思いは強いんですね。それだけに今、私が育てられて来た空気を私自らが薄めてきたのでないかという一つのいたみがあります。教区の一員となり、教区に育てられていく、そして教区の空気をつくっていく、そういうことの大事さを私たちは今改めて心にきぎんで教区のことを考えていかなければならないのだと思います。教区の恩義を受けて、教区に育てられて来た我々には、求道者を生み育てる空気を教区に取り戻していくという大きな責任あるのではないかと思います。そういう意味では、今教区は徳儀に立たされて、危機的などころまで来ているような気がします。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。亀谷先生、続きましてお願いいたします。

(亀谷先生)

今黒萩先生が言われたこととまた被るんですけど、このお題をいただいた時にですね、宮城先生が北海道教研の三〇周年の講演でお話しされた、記念誌にも載っていますけれども、そのお言葉を思い出したので、抜粋になります。紹介させていただきます。「教団は、いろんな矛盾や問題を抱えているが、教団あればこそ私どもは教法に遇い得た。それは、ガラスの火屋がランプの灯を守るように教法を守り伝えてくれたのである。ただ、問題は火屋はほっておくと煤けて、灯の輝きを火屋が逆に消してしまう。その煤けていく火屋を常に磨くようなものが教学のはたらきである。法を住持しているはずの教団が逆に法を隠すということについて、教団の在り方を問い直す、問い返すということが、教学の大きなはたらきである」。これは教団と教学という講題のもとでお話ししてくださいましたもの



ですが、この宮城先生のお言葉がこの設問に答えてくださっていると思います。例えば同朋会運動ということも大谷派という組織がなければ、おそらく今まで続いてこなかったんだろうと思います。私の身近なところで言えばこの三年、コロナの中で、自坊のご法座も中止せざるを得なかった。今月は無理だなということが何回かありました。その時は、やはり寂しい思いもしたのですが、その一方で「楽だな」と、「しなくていいのは楽だな」という心も起こってきたのが正直な気持ちです。そういう私ですが、いつもお参りしてくださる人の顔が浮かんだり、役員会や婦人会など、そういう組織の後押しがあって「やはり続けなければならない」という心もまた湧き起こってきたのも実際です。そういう意味で組織の存在は大きいと思います。もちろん、組織自体から人は生まれるということはありません。しかしながら、そこに黒萩さんも言われたように「我、念仏者たらん」、「我、生死を超えん」という叫びを抱いた人の歩みを支えるもの、そういう役割を背負っているところが組織ということの大事さだし、それが教化本部に願われていることだと思います。求道の灯を支え、その歩みを停滞させないランプの火屋としての組織ということが、教化ということでは見失ってはならないことだと思います。そして、宮城先生が言われているように、教団は教法を守る火屋の役割を担っているけれども、その火屋はほっておくと煤けて、かえってその灯を見えなくさせる、そういう危険性を孕んでいるという問題ですね。同朋会運動も同朋会運動は世界に捧げる運動だと言われます。つまり、同朋会運動というのは、教団を破る運動、教団を超える運動、教団外の人に関わる運動というのがその理念ですよ。それがいつの間にか内なる運動になっていくという危険性があるということを、私たちは常に見据えていなければならない。子ども会などでよく聞く言葉に「仲間作りは仲間外れを作る」というのがあります。それが、私たちの組織の中で起こっていくということが常にあると思います。だから「声が聞こえる」というか、教団内外の多くの人の厳しい批判も、ある意味、諸仏の声として聞く態度というか、組織の中に自己批判をする眼を常に持っていないと、教化本部というものも気がついたら、膠着化していくことになるのではないかと思います。もうひとつ「教化テーマ」について申しますと、その期その期にテーマが掲げられるわけですが、そのテーマが本当に自分たちの課題となっているのかということも吟味することが大切だと思います。つまり、今、僧侶として、真宗人として、そして、人間として課題となっている事柄をどうやってテーマに反映できるか、そういう視座を見失ってはならないと思います。そういう視座において出されたものなら、願いのこもったテーマになると思い

ます。それが一つの答えというか、スローガンの出されたテーマなら「そうなれない自分です」だけで終わっちゃう。そうなれない自分で終わるってことは、そのテーマが結局は自分の問題とはなっていないかったということかもしれません。それは私自身の課題なのですが、何かそういうことも感じたことです。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。お二人の先生のお話を聞かせていただきながら思われること、また別な形でも結構ですので、中野先生、お話いただければと思います。

（中野先生）

この設問では、一つ目の「真宗における組織の意味」について述べさせていただきます。私は、平成五年に大谷大谷を卒業して自坊に帰り今年で三〇年が経ち、同じ年数を住職として過ごしてきました。北海道教区の皆さんにはお育てをいただいたことに感謝し、今またあらためて実感しているところです。

宗門や教区、組、寺院も含めた真宗教団といえども一つの組織体ですから、行政や財政はとも大事なことです。教化懇談会冒頭の教務所長のご挨拶にもありましたように、現在、本山では宗務改革が進められています。この教団は営利を目的とした団体でないことは言うまでもありません。真宗大谷派なる宗門が組織体として存在する根拠は、そこに属する人たちが浄土真実の教えを宗とすることにあります。その意味では、僧伽の精神がそこにあるかどうか大事なのでしょう。もし僧伽の精神がなければ、それは世間の価値観に埋没した組織体ではないのです。

黒萩昌氏は二〇一〇年度の「教化研修基本方針」で、「組織というものが人を生み出す力を失った時、それは組織の死なのでしょう」と述べています。人を生み出す力を失ったのが組織の死であるとは、その組織に身を置く一人ひとりに僧伽の精神が失われたことを言うのでしょうか。組織に身を置く我々一人ひとりが、念仏者と言えるのかどうかを問われ続けることが大切なのではないでしょうか。

先ほど黒萩氏が、「念仏に教えられ、育てられることが大切だ」とおっしゃっていましたが、私は帯広別院の親鸞

講座で、中川皓三郎先生が信國淳先生に教えられた、「わかってもわからんでもいいから、念仏申しなさい。そして、念仏に育てられなさい」という言葉を聞かせていただきました。その意味では、組織の死とは念仏に育てられることがなくなることを言うのでしょうか。

毎年、私どもの真宗寺院で最も大切な報恩講のご満座では、「三朝浄土の大師等 哀愍摂受したまいて 真実信心すすめしめ 定聚のくらしいにいれしめよ」（聖典五〇五頁）のご和讃が勤まります。これは、親鸞聖人が「正定聚の位に入れさせてほしい」と願われている和讃ですが、同時に「三朝浄土の大師等」との出遇いによって正定聚に入れしめられたという、感動と確信においてうたわれたものだと思います。「三朝浄土の大師等」は直接的には「七祖たち」の意味ですが、あえて言うなら、そこにはいわゆる吉水教団で出遇った聖覚や隆寛という兄弟子をはじめとするお仲間、さらには、越後や関東で出会った多くのご門弟や御同行の方々も含まれると思います。親鸞聖人はその歩みの中で、多くの人との出遇いを通して真実の信心をたまわる身になったという確信のもと作られた和讃なのでしょう。

もし北海道教区が、我々のお寺もそうですが、念仏の教えを聞き、喜び、それに生きる人によって育てられる場でなくなるなら、あるいはともに教えを聞き、語り、学び合う場であることを失ったとき、それこそがお寺の死でありましょうし、またそういう僧伽の精神にこそ、真宗における組織体を形成する意義があるのではないのでしょうか。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします。

（金石先生）

私も北海道教区に戻ってきてから、長く組織の中で育てをいただいていたのだなということに改めて思いますので、非常に組織の大切さっていうのを感じております。思い出話になるようではありますが、北海道教区に戻ってまいりまして間もなくの頃、北海道教区で言うところの青少年教化要員、いわゆる青少年教化という教区事業に関わらせ

ていただいております。その教化要員時代に、実はこの教化本部発足への動きというものが教区内で起こっていったのです。我々は教化要員として青少年教化に携わっておりましたから、教区、教務所等によく顔を出しておりました時に、その教化本部を創る、創らない、元々ベースになるような話し合いが当時されていたのかなというのを記憶しております。その教化本部が発足されるかどうかという話し合いの最中に教区から、我々青少年教化要員に情報が提供されていくのです。本気で聞く気があったのかどうかわかりませんが、私たちが若かったですからね「どう思いますか」っていうようなことを聞かれても、ある意味ですね、青少年教化もなんとなくというか、先輩達に叩かれながらやっていた時でありますし、いわゆる組織といってもですね、願いや仕組、そういうこともよくわからないままやっていた時であります。ですから、単刀直入に教化本部というのができるかもしれませんという話を伝えられても、あんまりよくわからないのです。一体それどういうもののかなということを、よくわからずに、その説明を聞いておりましたが、その時に説明してくださいましたのが当時の教務所職員の方であります。この方がこういうことを言っておられたのです。 「私は問題意識さえあれば、こういった教化本部などという組織は必要ないと考えているのです」と。 こういう発言があったのです。 私も物を考える力も随分不足していたのだと思います。「ああ、そういうものなのだ」と「問題意識さえあれば何も組織や形などはいらぬのだ」と「そういう意見があるのだな」ということを鵜呑みにするかのよう聞いていたかなと思います。しかし、そういう議論を尽くされていく中で、私たちの先輩たちは、教化本部を発足させる、そのことをお選びになったのだなということとを思い、「問題意識さえあれば、形や組織はなくてもいいのだ」という意見もあったのでしようが、私たちの先輩は「いや、やはり形や組織を持つのだ」という選択をされていたのだなということを思います。申し上げたいのは、その教化本部を生み出していかうとする精神なのです。その願いが教化本部という形を持って結実したということが、教化本部の私は理念だろうと思います。理念という、表現を変えれば、「教区教化は教区人の手で」等ありますけれども、やはりその源泉、根っこにあるのは、その教化本部を生み出そうという精神が、願いが、教化本部という形を取ったのだ。その精神が形を取ったという、これがとても大事なことだということがあります。しかし、形を持った限り、それはもちろん、仕組みや制度等ありますけれども、その制度や仕組み等を、実はその教化本部を生み出した精神が批判していくということがあろうかと思えます。ですから、常に教化本部というものを生み出

したその精神が関わる教区人等を批判し続けていく。そして、教化本部が生み出した施策であっても、教化本部が生み出そうとする精神が、その一切を俎上にあげてくるのだなということを思っております。ですから、先輩たちがまさに創ることを選んだ組織、形というものの意味合いとか、そういったものを改めて考えさせていただいているということがございます。精神は形となって表現されるのですね。そして、その形を通じて託された精神を、私たちは受けとめていこうと、こういう縁の連続ではないかなということを思っております。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。設問二において、真宗における組織また教化本部という組織の理念について色々とお聞かせいただきました。一方で、組織の持つ危うさということが、同時に問題とされてきたということを思います。私たちが組織に関わり、真面目に色々なことを話し合い、一人一人の求道というものを大事にしていこうという中でも、やはりそこに知らず知らずのうちに、閉塞した状況ということが生まれてくるということを思います。私は、長い間教化本部に関わらせていただきましたが、黒萩先生が本部長をやられていた時には、私はある部会の部長でした。黒萩先生は、その時に「マンネリ化の打破」ということを常に組織の課題としておられて、教化本部員に何度もそのことを伝えてくださいました。

そこで、設問三ということで、組織の持つ危うさについてということでお話をいたしたいと思います。二〇〇四年度、教化研修基本方針で藤田本部長は、「宗門や教区など、組織が一つの方針なり、統一見解などを表明することは大きなことであるが、そのことによって一人ひとりが思考停止に陥る危険性を認識しなければならぬ。集団・組織が画一的に決めると他をすべて切り捨ててしまうことになりかねない」と指摘されております。これはひとつの集団・組織であれば常に抱えている課題かと思えます。

あらためて、組織であるがゆえに抱え続ける課題ということと思われることをお聞かせください。またその課題を乗り越えるためには、どのような視座が必要だとお考えでしょうか。まず、黒萩先生と、次に金石先生のお話を聞かせたいと思います。では、黒萩先生お願いいたします。

## 設問三【組織のもつ危うさについて】

(黒萩先生)

そういうことを、藤田さんは問題にされていたんだということのを改めて思い起こしています。確かにそういうことはあると思うんですね。一つの方針や見解というものが答えとして出されて、トップダウンですよね。それに宗門・教区内の一人ひとりが縛られて翻弄されて身動きが取れなくなる。しかし、それは発信する側の問題と、それを受け止める側の問題との両方にあると思うんですね。

具体的には、教化本部の場合でいうと、宗門から出て来た施策をどう受け止めるかという問題もありますし、一方では自分たちが教区に発信するときにはどういう姿勢で発信していくのかということが問われているのだと思います。それは、答えという形で出すのは良くないということよりも、もつと根つこの問題ですね。そういう見解とか施策というものが一体どこから出てきたのかと、こういう問題です。それは、一つは同朋会運動の精神に立つと、我々は長い間、宗祖の教えに背いてきた。そして、宗祖の教えを利用してそこに胡座をかいてきた。そのことを宗門白書では、「宗門はながい間の仏教的因習によって、その形態を保っているにすぎない現状である」と厳しく指摘されている。このような在り方から、我々僧侶はいつの間にか時代社会から相手にされなくなってきたのではないか。そういう一つのいたみですよね。

今、宗門・教区から出された見解・施策というものがそのいたみから出たものなのか、それとも、「寺を取り巻く環境が随分厳しくなった」と、そんな状況の中で寺が生き延びるために何かしなければと、簡単に言う生き延びるために時代社会に迎合していくような魂胆で発信されたものなのか、そこが非常に問題ですね。我々の怠惰と弱さというものが教えを差し置いて表に出てきた時に、どこまでも教えを曖昧にして時代社会に迎合して生き延びて行くこうとする。そういうところが我々にあるんですね。そういう教えに対する怠惰さと時代社会の流れに対する弱さが我々の中にあるということのを、やっぱりきちっと認識しなければならぬと思うんですね。

そうすると、例えば宗門から出された施策の中に、これは本当に深いいたみの中から願いを込めて発信されたものなのか、それとも机上で、時代社会に迎合するようなかたちで安易に出されたものなのか、そのことをしっかり

と見破っていく眼が必要なのだと思います。そして、その施策をどのようなかたちで受け入れていくかということ  
を教区の責任で判断していくということが大事なのだと思います。

一方、教化本部が教区に何かを発信していこうとする時、その施策が「懺悔と求道の実践」から出て来たもの  
のか、それとも時代社会に迎合するかたちでとりあえず出されたものなのかということ、教化本部自らが互いに  
議論を積んで精査していくような、そういう厳しきさというものが教化本部の中に起こってこなければならぬのだ  
ろうと思います。

「教区の教化は教区人の手で」という願いから教化本部が発足したということは、従来の教化委員会のもとで綿々  
と続いてきた教化事業自体がマンネリ化してきた。そのマンネリ化を打ち破るために教化本部が立ち上がったとい  
うことは私はあると思いますよ。ただ、問題はその教化本部も二四年続いたらマンネリ化していくんですよ。であ  
ればこそ、教化本部自体が自ら絶えずマンネリ化を破りながら破りながら歩んでいかなければならないのだと思  
います。マンネリ化を破るということは、何も新しいことをするというだけではいけません。どこで破るかと言  
たら、宗祖に帰る、歎異の精神で破っていかなければ力は持たないですよ。時代社会に迎合していこうとい  
うな魂胆では、それは破れないだろうということ、私には思います。

ですから、藤田さんがおっしゃったことは大事なご指摘だと思いますが、もう一つ言うと宗門から出された見解  
と施策、そして自分たちが出そうとしている見解と施策が一体どのような願いから出てきたのか、そういうこと  
を厳しく自分たちで精査していくということは教化本部にとつてとても大事なななだと思えます。教化事業は三年でマ  
ンネリ化しますよ。六年経つたらもう自分たちでそのマンネリ化をそれを破れなくなります。私はそう思います。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。それでは続きまして、金石先生、お願いいたします。

(金石先生)

失礼します。先生のご指摘の中に「集団組織が画的に」とございますが、その画的という表現に引っかかっ

て想起されたのは、我々の所属しているような、いわゆる大きな教団というのは、別名「制度宗教」とこう呼ばれているのであります。つまり、制度を持って運営されている。いわゆるルールであるとか、そういったものを持って運営されている教団として「制度宗教」とこういうふうに言われているのであります。その表現が非常に気になった時期がありまして色々考えさせられたのであります。基本的に理念があつて、その理念に基づいてルールや制度や施策や仕組みというものが生み出されていくと。しかし、ひとたび制度やルールというものが運用されていった時に、実は私たちは理念よりそのルールであるとか、施策であるとか、仕組みの方を優先してしまうと、理念を忘れてしまうのだというようなことが、当時考えさせられたことであります。組織では決まった施策、ルールさえ守っていればいいのだと、こういつて胡座をかいていつてしまい、根本たる理念であるとか、願ひであるとか、精神であるということをお忘れ閉じこもつていくということが起こつていくのではないかなと。やはり理念によって開かれた施策や仕組みやルールであるならば、その理念、願ひに収まつていく。かえつていける、そういったものでなくてはならないのかなということをお思います。もうひとつは、やはり私たちの所属している組織が一体どこを向いているのだろうかということも、改めてしっかりと確かめ、進めていく必要があるのではないかなということをお思います。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。それでは、二人の先生方のご意見を聞かせていただきながら、中野先生、ご意見をいただきたいと思います。

（中野先生）

「組織のもつ危うさについて」、また「組織であるがゆえに抱え続ける課題を乗り越えるために、どのような視座が必要か」についてです。藤田彰美氏は、第一期と第二期の教化本部長をされましたが、私は第二期の常任本部長として関わりを持たせていただきました。同時に社会教化部門の幹事も務め、藤田本部長をはじめ常任本部の皆さん、また教化本部に関わつた多くの方々には、本当に様々なことを教えていただきました。



教化本部では年度当初に「教化研修基本方針」を出していますが、統一見解はこれまであまり出していません。本部としては統一見解を出すことよりも、教化における基本方針を表明することのほうが大切でしょう。事情により統一見解を出すことも必要かもしれませんが、それによって思考停止に陥ってはなりません。

北海道教区における教学教化の組織体の願いが端的に現れているのは、第八期まで歩みを進めてきた教化本部であり、来年度五〇周年を迎える北海道教学研究所です。二〇一一年に「宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要」が勤まりましたが、教区ではそのお待ち受けとして、「教法と儀式」、「地域と共に生きる真宗寺院」、「あなたと私でつくる寺」、「青少年教化の方向性を問う親鸞の旅」という四つの部会が立ち上がりました。私は、教区の御遠忌をどうお迎えするのかという姿勢が、この四部会に現れていると思います。各部会の内容は、講義と座談で徹底してきました。講師から講義をいただいて、それを聞いた数名の部会員で座談を行うという、教学と教化を重視してきた北海道教区の長い歴史の中で培った特徴がここに表現されています。

教化本部における一つひとつの部会は、研修会等での講義と座談や事前会議における話し合いがとても大事です。つまり聞法と議論、攻究です。教研もそれらをとっても大切にしてきました。その内容は、講義と攻究の繰り返ししかないと言っても過言ではありません。これらは北海道教区が培ってきたものですが、その源流には吉水での出会いをはじめとする宗祖ご自身の歩みがあるのだと思います。それを蓮如上人は『御文』の中で、「仏法は、聴聞にきわまり」（聖典八八九頁）、「寄り合い談合せよ」（聖典八七七頁）と、時を超えて私どもにお勧めくださっているのでしょう。今後も教化本部では、ここにこそ要があり、いのちがあることを重視していただきたいと願っています。

先ほども少し申し上げましたが、真宗寺院は報恩講を大切にお勤めしてきたことから「報恩講教団」とも呼ばれます。今も昔も変わりはありませんが、これから寺院の運営はますます厳しくなるでしょう。新型コロナウイルスのまん延により、お斎の問題もあります。私も三〇年間住職を務めてきて、このコロナ禍の三年は今までと違うお斎のない報恩講を勤めてきました。しかし同時に、どこかホッとする自分もいるのです。お斎をどう復活させるのか、ホッとしている自分の重い腰をどう上げるのか悩んでいます。そこに願われているのは講組織の大切さだと思います。講組織の中で僧伽の精神を大切にするとともに、宗門、教区、組という組織の要があるのだと思います。そこにこそ「組織のもつ危うさ」を越えていく原点があるのでしょう。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。いま教区御遠忌の話が少し出ました。その当時委員長をやられたのが黒萩先生です。今、中野先生から四部会、徹底した講義と座談ということで、教区御遠忌という営みがなされてきたという話がありました。教区御遠忌自体にあまり触れていない若い世代の方も聴講していただけますので、その教区御遠忌に関わられた中で考えていたことを、黒萩先生、少しだけお話いただけませんか。設問にはごさいませんが、少しお話いただければと思います。

(黒萩先生)

今突然ですからなんとも言えませんが、今考えるとよくああいう施策が教区会を通ったなということを変更して思うんですね。それはどういふことかと言うと、各教区で御遠忌が勤まりましたが、各教区それぞれが独自の発想で事業計画が立てられたと思いますが、基本的には教区内に広く門戸を広げて、法要と記念講演という基本的な法要の在り方はまもられていたように思います。そんな中で当時我々が考えたのは、何とか御遠忌後の歩みにつながる教区御遠忌をということでした。具体的には、「教法と儀式」・「地域と共に生きる真宗寺院」・「ワタシとあなたでつくる寺」・「青少年教化の方向性を問う〜親鸞への旅〜」という四つの部会をつくって、二年間それぞれの講師を中心に若手僧侶十人程度が議論を重ね、教区御遠忌大会で代表者が発表するというものでした。その時ベースになったのは北海道教研です。

そして、もう一つ私たちが考えたことは、教区御遠忌を通して我々教区人と教務所員が一つの仕事をするとしたことでした。その私たちの思いに、当時の教務所長の藤岡さんが賛同して下さい、教務所員は全員それぞれ四つの部会に入って教区の若手と同じ立場に立って議論を重ねました。ですから、そのときの所員とは一緒に仕事したという感覚が今でもありますよね。こういうかたちの教区御遠忌でしたから、参加者は門徒会の方々と推協の方々と育成員という限られたものでした。

同朋会運動五〇年ということも念頭にあり、これから教区がどう歩んでいくべきかと考えた時、やはり僧侶自身が深いいたみと危機意識に立たなければと。御遠忌を勤めてそれで終わりということではなく、一人ひとりが深い

いたみを持って、そして、御遠忌が終わったらそれぞれの現場、各寺で立ち上がっていく、そのための真剣な議論と学びをさせていただく場を開くという発想で教区御遠忌を迎えたと思います。それが、どういうかたちで今教区に生かされているのかどうかはまだわかりませんが、そういうことです。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。すいません、突然のご質問に答えていただきまして、ありがとうございます。それでは続きまして、亀谷先生、お願いいたします。

(亀谷先生)

今、たくさん意見を聞かせていただいた中で、「マンネリ化」という話がずっとされていますが、ある意味、報恩講って大いなるマンネリですよ。ずっと同じことをやっているんです。そのマンネリ化を破るのは何かといたら、やっぱり問いなんだと思います。「答えに立つな、問いに立て」と言われますね。同朋会運動しかり、教化本部しかり、今の黒萩さんのお話を聞いてもしかり、それまでの歩みが停滞し、固定化していく中で、どうしたらいいんだろうと、その問題点を精査した時に、その問いのところでの次の運動がまた起こってくる。答えありきでやってしまったら、新しい運動をしても新鮮なものにはなっていないかと思うんです。だから、マンネリ化になっている報恩講をなんとかしなきゃダメだって僕もいろんなことやってきましたけど、黒萩さんの話じゃないですが、答えに立って新しいこととしても六年で飽きる、マンネリ化する。プロジェクトで御伝鈔を映してみたり、いろんなことやってまた止めてみたりしました。でも、答えに立って新しいことしようという限りは、形変えてもやっぱりマンネリ化になっていくのだと思います。でも、同じことを続けていても、そこに問いが新鮮なら、空気が違ってくるってことがあるような気がします。だから、マンネリ化を破るのはどこまでも瑞々しい問いだと思います。問題はその問いがどう起こるか。よく楠先生がおっしゃっていたのは、自分の懐から出してくるような問いではなく、教えから問われるような問い、そこに常に立ち続けていくことが大切だと。もう少し具体的に言いますと、常に本願に軸足を置いて、方針とか見解とか施策について考えるということが大切だと。本願に軸足を置くなんていうと

全く雲を掴むような話に聞こえるかもしれませんが。しかし、その方針や施策や見解や方向が本願にかなっていないかどうかを見失っては、真宗の教化の運動にはなっていないかと思えます。ご承知の通り、曾我先生は四十八願は浄土の憲法と言われますね。憲法は日本国憲法もそうですけども、憲法そのものを現実的な形にするというよりも、今やっていることで何か歪みが起こった時、憲法ではどうだろうと、憲法の問題に立ち返る。つまり、いつも立ち返っていく指針であり、道理であり、願いとして本願というのはあるんだということを思います。なんかそういうところにですね、常に立ち返りながらものを進めていかないと、使っている言葉は仏教の言葉だったり、やっていることは仏教的な施策だったりするけど、気がついてみたら娑婆の活動とあまり変わらない。先ほど所長が同朋社会の顕現と実現という言葉でおっしゃっていましたね。僕も、この実現という言葉が表に出てきた時に、本気で言っているんだらうかと感じました。つまり、顕現もはっきりしてないのに、どう実現していくのか。顕現っていうのは、やっぱり本願の精神が私の上に自覚されるとか、領かれるってことが顕現であって、何かをもって「これが顕現ですよ」っていうことではないわけで、その本願の精神が自分の中で領かれた時に「自分の歩みはどうだろうかな」と、それこそ歎異の精神ですね。そこに立って、新たな一歩を踏み出そうということがあるのであって、実現という言葉聞いて、本当に本願ということに立ち返って言っているのかなとすることを思っています。そういう意味で話が横へ行きましたけれども、方針や見解も娑婆の論理の中に取り込まれる恐れがある中で、どこまでも本願の言葉に立ち返っていく、それが常に問われているんじゃないかなと思うことです。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。それでは設問3までお話を進めさせていただきましたので、一〇分休憩をさせていただきます。五五分から再開をさせていただきます。

## 設問四【真宗寺院、真宗僧侶の本務について】

(寺澤本部長)

設問四といたしまして、ここでは真宗寺院、真宗僧侶の本務について考えたいと思います。  
藤田彰美本部長が二〇〇三年教化研修基本方針において冒頭「同朋会運動の願い」を掲載し、続いて課題を述べておられます。

同朋会運動の願い、真宗同朋会とは、純粹なる信仰運動である。それは従来単に門徒と称していただけのものが、心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、代々檀家と言っていただけのものが、全生活をあげて本願念仏の正信に立っていただくための運動である。その時寺がほんとうの寺となり、寺の繁昌、一宗の繁昌となる。然し単に一寺、一宗の繁栄のためのものでは決してない。それは「人類に捧げる教団」である。世界中の人間の真の幸福を開かんとする運動である。

〔「真宗」一九六二年（昭和三七年十二月号「巻頭言」）〕

昨年十二月に「教勢調査」について教化本部員の学習会を開催いたしました。その中で特に日本の人口推移、人口の都市集中化、町村部における過疎の問題、あるいは少子・高齢化等の現況と将来展望について、統計資料を学びました。そして、これからの宗門、とりわけ私たちが身を置く寺院の一〇年後二〇年後について大きな危機感をおぼえずにはおられませんでした。それは、私どもに宗門・真宗寺院の「本来性を回復すべし」という深いうながしでもありましよう。

これが藤田本部長の二〇〇三年教化研修基本方針の文章であります。抜粋でありますけれども、この文章から、藤田本部長が二〇年前、過疎・過密、少子高齢化の問題を学び、状況に対する危機意識を、そして、真宗寺院・教区・宗門やそこに身を置くご自身のあり方に対して問いを持たれていたことが伝わってきます。そして課題とされているのが、宗門・真宗寺院の「本来性を回復すべし」ということです。この文章から二〇年を経過した現在、過疎、過密、少子高齢化がさらに進んだ時代と捉え、真宗寺院が抱える様々な問題をどのように考え歩んでいくべきかということの議論が始まりました。しかしこのことは、単に寺院の存続や相続の視点で議論されていく問題ではないということをお話しは心に留め大事に考えていきたいと思います。親鸞聖人の時代認識と課題は「末法、そして五濁の世・無仏の時に於いて全ての人と共に仏道を歩む」ということだと私は受け止めています。つまり、親鸞聖人は、仏道成就の視点で時代を認識し、あらゆる人が仏道を成就していくことを仏教者の課題としておられると思うのです。そして、その道は念仏申す生活であるということをお話しさせていただきます。ですから、過疎・過密、少子高齢化の現代における寺のあり方も、末法、五濁の世、無仏の時に於いて全ての人と共に仏道を歩むという課題と重ねあわせて私たち一人一人が考えていくことを忘れてはならないと思います。藤田本部長の文章を読ませていただく中でこのようなことを私なりに考えさせていただきました。

さて、ここでは「真宗寺院、真宗僧侶の本務について」を考えさせていただきます。そのことで先生方に三点お伺いをさせていただきます。

- ① 同朋会運動の願いや同朋会運動を現在どのように受け止めておられるか。
- ② 宗門・真宗寺院・さらに付け加えますと教区の「本来性を回復すべし」とはいかなることか。
- ③ 今、そしてこれからの真宗寺院・僧侶の本務とは何か。

ということについてお話ししたいと思います。①②③につきまして、その都度、先生方四人のお話をいただきます。意見交換をさせていただきますと思います。それではまず①同朋会運動の願いや同朋会運動を現在どのように受け止めておられるか。黒萩先生、亀谷先生、金石先生、中野先生の順で答えたいと思います。それでは黒萩先生、お願いいたします。

## 設問四①【同朋会運動の願いや同朋会運動を現在どのよう受け止めておられるか】

(黒萩先生)

時間も押しているということですので、簡単に申し上げたいなと思うんですけども、私は同朋会運動は「純粹なる信仰運動」ということに尽きるんだろうということをお思います。それは六〇年の歴史の中でいろんなことが起こってきました。先ほど所長のお話にもありましたけども、大きなことで言うとお教団問題ですよ。私が大学卒業した年に分裂報恩講だったわけですね。何かすごい嵐が吹き荒れているなという感覚がありました。いろんなことが起こってきて、その一つひとつのことを検証していくことも大事なんですけど、私は同朋会運動の本質は「純粹なる信仰運動」だと思っています。そこに立つと、同朋会運動は、過去の問題でなく歴史上の出来事でもない。そうではなくて、宗祖親鸞聖人のご信心に生きんとする純粹なる信仰運動が、今、私の上に起こっているのかどうかという問題なんです。私の上で、同朋会運動が始まったかどうかということに立たなければ、私たちにとって同朋会運動が本当の動きになって来ない。そういう意味では、同朋会運動は過去のことではなくて現在進行形なんです。よ。

私は宗祖親鸞聖人のご信心に生きんとすることは、信心が課題となるということだと思います。そこにやはり求道ということの厳しさがあるのだらうと思うんですね。信心が課題となるということは、回心が課題となるということなんだらうと。こういうことは今はあまり言われませんが、しかし、回心ということが唯一の課題となっていく、そこに、仏法の求め方がガラリとかわっていくんだらうと思うんですね。我々が人生論を語るために宗祖の立教開宗があったわけではないですよ。八〇〇年後の私たちが真宗の衣を着て、人生論を語るために教行信証が書かれたわけではないですよ。我々はそういうことを自分自身の中ではっきりさせることは大事なんだろうと。ここに三人の先生方がおられるので、どうとられるかちよつと怖い気もしますけど、私は回心ということが我々真宗門徒の課題なんだ。何かそういうことを自分自身にも言いたい気持ちで今いるわけです。

最終的には、結論は「純粹なる信仰運動」が今私の上に始まっているのかどうか。ここが問われているのだと思います。私は同朋会運動はここに尽きると今考えております。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。亀谷先生、お願いいたします。

(亀谷先生)

黒萩先生から「回心が課題なんだ」という押さえがありました。その通りだと思えますが、回心という時に、どうしても特別な体験ということイメージしてしまうわけですね。そのことを私は否定も肯定もいたしません。それぞれの歩みの中での目覚めであります。ただ、同朋会運動を考える時に、見失ってならないことは、同朋会運動の願いつてなんだろうかということです。つまり具体的にどう押さえられるんだろうかということです。ある人が言っていたんですが、同朋会運動が始まった当時、それまでいろんな形でお寺に集うたり、聴聞してきた人にとって、この同朋会運動が始まってガラリと風景が変わった、すごいと感じられたということです。ただ、その方々は始発駅から電車に乗ったと言われます。同朋会運動のないところにおいて始発駅から乗ったから風景が変わっているのをすごいと感じた。しかし、私たちは途中乗車をしていると言われました。つまりすでに同朋会運動の中に入っていた。だから何が同朋会運動で、以前とどう違うんだろうということがよく分からない。それは古い宗門体質の問題とか、宗門が閉鎖的だったとか色々な言葉では聞いているのだけれど、そういう学びが現実感覚として感じにくいということが実際だということでしょう。そういう意味では、同朋会運動の歴史的押さえや・知的学びはとても大事なんですけど、それを踏まえて、いま同朋会運動が自分の課題としてどこまでこの身に刻まれているかということについて、真摯に向き合っていかなければダメだと思います。教区の御遠忌でも申し上げたのですが、寺川先生が「念仏の僧伽を求めて」という同朋会運動の歩みについての本を出されていますが、まさしく、同朋会とは「念仏の僧伽」、運動とは「求めて」、このように言えると思います。「念仏の僧伽を求めて」ということが同朋会運動である。そうすると、それ以前が念仏の僧伽ということが課題となっていなかった、それこそ前回の教化本部のテーマは「人間獲得」ですよ。僧俗や男女や老若や、そして宗派やそうでない人との枠を超えて、どこで人間が獲得できるのか。生々しい日常生活の中でどこで「共に」ということが言えるのか、そういうことを本願とか浄土に、常に軸足を置いて歩んでいこうとしたのが同朋会運動。その意味で、私たちの中で、そういうことが宿題となっていない



ような歩みならば、私の中で同朋会運動は始まっているということになるのではないかと思います。どこまでも依りどころは、仏の平等の大慈悲心である。それをどれだけ憶念できるか。ですから、今、旃陀羅問題が喫緊の課題になっていますが、そのことも浄土というところに軸足を置いてみたら、差別するものがどう救われるかということも、私たちは見失ってはならないと思います。差別するものとされるものが、どこでひとつになれるのか、どこで共に救われるのか、そういう視点を持ち続けるところに同朋会運動の厳しき、そして深さがあるのではないかと思うことでもあります。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします

(金石先生)

「危機を危機と感じないのが危機である」とよく聞かされた言葉なのです。危機を危機として感じないということが危機だ。私はこの同朋会運動は、危機を危機と実感させた促しに、その源泉があったのだと思っております。やはり当時からですね、その願いに書かれているように、まさにそういった危機感というものが、その危機感を危機感として促していった、そういう働きに源泉があったのだらうと思っております。そしてその同朋会運動は、先ほどもちよつと申しましたが、制度や施策によって始まったのではなく、同朋会運動を生み出すとする精神こそが同朋会運動であったのではないかなと思います。それは自らも含め、教団や寺院が宗祖の教えにかなっているだろうかという悲歎の歩みとっていいのかなと思います。一九六二年に施行されたのは条例化された同朋会運動なのですが、同朋会運動を生み出すとする精神が形を持って結実し、制度や施策という具体性を持ったということなのだと思います。しかし、その展開、歩みの中で、現状を肯定しないところにその同朋会運動を生み出すとした精神があるかと思えます。精神が形を持った時から、形は精神に「これでいいのか」「それでよいのか」と問われ続けています。それは、現状の制度、施策に対しても祖上に上がっていくことでもあります。そういった常に同朋会運動を生み出すとした精神、そこにかえることによって、私たちのその不断の歩みというものが

展開されていくのかなというように感じております。そして、その同朋会運動というのは、我々の所属する教団であって、教団を超えて始まった、そういう歩みではなかったのかなというふうに、今考えさせていただいていることとございます。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。それでは、中野先生、お願いいたします。

(中野先生)

私からはまず、宗祖親鸞聖人七〇〇回御遠忌法要が厳修された翌年の一九六二年に、真宗大谷派の機関誌『真宗』の巻頭言にある、真宗同朋会運動についての文章を読ませていただきます。「真宗同朋会とは、純粹なる信仰運動である。それは従来単に門徒と称していただけのものが、心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、代々檀家とやっていただけただけのものが、全生活をあげて本願念仏の正信に立っていただくための運動である。その時寺がほんとうの寺となり、寺の繁盛、一宗の繁盛となる。然し単に一寺、一宗の繁栄のためのものでは決してない。それは「人類に捧げる教団」である。世界中の人間の真の幸福を開かんとする運動である」。

ここで言われるように、真宗同朋会運動とは「全生活をあげて本願念仏の正信に立つ」運動です。設問の「真宗寺院、真宗僧侶の本務について」の視座とは、この「全生活をあげて本願念仏の正信に立つ」ことに尽きるのです。う。

二〇〇七年度の「教化研修基本方針」の中に、真宗同朋会運動に関わったご門徒の「親鸞聖人の教えにご縁を結ばれる運動」との言葉が記載されています。真宗同朋会運動とは、親鸞聖人の教えにご縁を結ぶ運動だと。私はこの言葉を、「真宗同朋会運動とは本願念仏の教えを聞く者になれという、諸仏としての宗祖の声を聞き開く運動である」と受け止めたいと思います。このたびの教化懇談会で繰り返し申し上げていることですが、私どもが念仏の教えを聞き、喜び、それに生きている人の声を聞くという、まさに諸仏の声を聞くところに「本願念仏の正信に立つ」ということがあるのではないのでしょうか。そこにこそ「諸仏称名」「衆生聞名」の具体性があるのだと思います。

もう一点ですが、以前、北海道教務所で教区駐在教導をされていた谷本修さんという方がおられます。今は静岡県のお寺に入寺されましたが、その方が私ども第一七組での真宗同朋会運動に関する研修会に講師で来られた際、「真宗同朋会運動とは、読んで字のごとく、真宗の教えを聞く同朋に会う運動です」とおっしゃっていました。私は「なるほど」と思い、とても印象に残っています。先ほど申し上げた、本願念仏の正信に立ち、親鸞聖人の教えにご縁の結ばれることの具体性は、仏法に遇うことを通して人に遇い自己に遇うことにあるのでしょうか。仏法に遇い、人に遇い、そして自己に遇う。これは最近の私のテーマですが、自己に遇ったらそれで終わりなのではなく、その自己をしてまた仏法に聞きたずねていくという、機法二種深信に示される円環が大事なのだと思います。そこに必ず僧伽が介在していることが、真宗同朋会運動の大きな特徴です。そういう念仏の僧伽、つまり仏法や同朋との出遇いの場を開き続けることが教区事業の最大の使命だと思います。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。まず①同朋会運動の願いや同朋会運動を現在どのようにとらえているのかということ、先生方の同朋会運動の受け止め方をお聞かせいただきまして、私なりにご発言を整理させていただきますと、黒萩先生は「純粹なる信仰運動」が同朋会運動なんだと、宗祖親鸞聖人の信心に生きようとする、そういう純粹なる信仰運動、それが私の上に起こっているかと。現在進行形、そして回心が課題なんだということをお話いただきました。亀谷先生におかれましては、同朋会運動とは、同朋会は「念仏の僧伽」、運動というのは「求めている」、つまり、念仏の僧伽を求めてと、それが同朋会運動であるというお話をいただきました。金石先生におかれましては、自らも含め、教団や寺院が宗祖の教えにかなっているだろうかという悲歎の歩み、これが同朋会運動であると。中野先生は「同朋会運動の願い」の言葉を受け止めていただきまして、全生活を上げて本願念仏の正信に立つ運動。そして、本願念仏の教えを聞くものとなれとの諸仏としての宗祖親鸞聖人からのおすすめてうながし、声を聞き開く運動。また、谷本元北海道教区の駐在教導の言葉を引用されて、真宗の教えを聞く同朋に会う運動、こういう形で受け止めをいただきました。同朋会運動は、私一人の上に、現に展開していくべき運動であるということ、先生方からいただいたわけであり。さらに、亀谷先生のご発言の中に、この同朋会運動の願いを、同朋会運

動の具体的内容というのはどうということかと、踏み込んでご発言をいただきました。その中で僧俗、男女、老若の違いを超えて、どこで人間が獲得できるのかと。日常生活の中でどこに共にということが顕現できるのかと。そういうことを本願浄土ということに軸足を置いて問うているのかと。それが同朋会運動なんだという具体的な同朋会運動の内容をお話しいただいたところでもあります。同朋会運動とはということで先生方からお聞かせいただきましたが、改めて亀谷先生の方から、同朋会運動の具体性ということで、共に、日常生活で共にということの本願浄土ということを軸足において明らかにしていけるかということをお話いただきましたので、もう一つ踏み込んだ同朋会運動の具体性、その視点ということを、他の先生方からもお話いただければと思います。同朋会運動の具体性、またその視点、そしてもっと言えば、本願浄土ということに軸足を置いて、求め明らかにしていく運動ということ、本願浄土が課題とされていること、それはどうということなんだろうかということ、思うところをお話いただきたいと思います。全員にお聞きする時間があるかもしれませんので黒萩先生よろしいでしょうか。今、亀谷先生から同朋会運動の具体的内容ということは、僧俗、男女、老若等の違いを超えて、どこで人間を獲得できるのか。生々しい日常生活の中で、どこで共にということを顕現できるのか、そういうことを本願浄土ということに、常に軸足を置いて問うていくということが、同朋会運動の具体性だということをお話いただきましたけども、それに付いて思うところですか、本願浄土という形で、私たちへの課題とされていることは何か、ということをお話いただければと思います。

(黒萩先生)

宮城先生がおっしゃったのかなと思うのですが、「御同朋御同行というのは、全ての人を御同朋御同行といたदैいていける世界が私の上に開けているかどうかだ」と、そういう世界は私一人(いちにん)の上に開かれるんですよ。そうすると、それは信の一念なんです。私たちはなんとなく、「共に」ということを安易に使ってしまいますけども、例えば一切を諸仏といたदैいていける世界というのは、信の一念に立つところとしか開かれないのでしょう。我々は、実はそういう一切を諸仏として拜んでいけるような世界に事実として身を置いている。しかし、その世界を見失っているという問題じゃないですか。私の学生時代は、帰郷の際は飛行機ではなく列車で帰ってき

て来ていました。朝、京都を発つと青森まで特急で一三時間ぐらいかかったと記憶しています。そうすると、山形・秋田・青森とだんだんと東北の方に近づいてくると街の家々に灯りがともってくる。それを車窓から眺めていると、そこに住んでいる一人ひとりが自分の分限の中で、お互いに犯すことも侵されることもなく一つの街に溶け合っているように見えるんですね。実際はそういうことなんだと思うんです。本当は絶対他力の一如の世界の中を生かされているんです。ただ、それを我々は見失っているんだと。その世界をどこで回復するかいえば信の一念しかないんですよ。さつき回心ということを行いましたけども、そういう見失っている一如の世界を取り戻す歩みが我々の仏道なのではないかと思えます。道德・倫理の世界でみんな一緒にというようなことではないのだと思えます。信の一念において諸仏を見出していける一人（いちにん）になる。親鸞聖人の言葉をかりると「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」、そういう世界に宗祖はおられたんですね。でも、我々はその世界を見失っている、そういうことなのだと思います。そしてその世界を回復するのは信の一念しかないと思えます。

（寺澤本部長）

亀谷先生、いまのお話を伺いながら、思うところをお聞かせいただきたいと思います。

（亀谷先生）

信の一念のところを開けてくる世界ということは、今、黒萩さんがご指摘をされた通りだと思います。いわゆるヒューマニズムにおける「共に」とか「みんな仲良く」ということではないことですね。例えば僧伽ということであれば、同じ教えを聞くものの集まりが単純に僧伽とは言えない。本願浄土を依りどころとするということでは、私は本願の第一願から第十一願の国中人天の願が僧伽の具体的願いを表している願だと思っただけで、それについてよく申し上げていることなのですが、「自分も他人も含めて、どんな人も軽く見ない。その命の重さにおいて向き合っていく。そして、いかなる存在も、無条件に大切にできる人となってほしい」、これが僕の本願の心、「共に」の心だと思っただけです。この心が私たちの理知分別を超えて、いのちそのものが願っている願いだと思えます。先ほど「浄土の憲法」と言いましたが、その本願の心に立ちかえったとき、それに促されて生きている私たちであ

りながら、いかにその心を見失っている私であるかどうかがわかる。そのことを教えに聞き、信心をいただくことを通して、ここに本当の共にということがあったんだ。自分も他人も含めて、どんな人も軽く見ない。そのいのちの歴史、いのちの重さ、業に、本当に頭を下げながらいのちに向き合っていく、そういう眼が開いた私のところに僧伽があるのでしよう。私一人のところ、そういう眼が開けるところが僧伽の成就なんだということを、本願浄土に軸足を置いて考えるとき見えてくるのではないかと思うことです。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。それでは続きまして、設問四の②に移らせていただきます。黒萩先生、お願いいたします。

## 設問四②【宗門・真宗寺院・教区の「本来性を回復すべし」とはいかなることか】

(黒萩先生)

要するに本来性が問われるということは、本来性を失っているということです。それは僧伽を失っている。先ほどから出ている言葉をお借りするとそういうことなのです。僧伽を失っているのは誰かと言うと私なんです。そこから出発するということです。それが純粹なる信仰運動だということを私は思うんですね。

宗門白書の中に、「われわれ宗門人は七〇〇年間、宗祖聖人の遺徳の上に安逸をむさぼってきたのである」とありますが、これは私がですよ。「私が七〇〇年間、宗祖聖人の遺徳の上に安逸をむさぼってきた」。我々には宗門人七〇〇年間の全責任がある、自分に繋がってきた歴史の一切の責任を担って立ち上がる。こういうところに親鸞聖人の宿業観というものがあるのだと思います。そういうことが、実はあの懺悔ということの内容なんだと思うんですね。ですから、随分、寺や僧侶を取り巻く環境がまずくなってきたぞと、どうしたらいいんだろうかという話ではなくて、七〇〇年間宗祖に背きながら宗祖を利用してそこに胡座をかいてきた。他でもないそれが私だった。そういうところ立って本当に仏法を求め。そういう歩みが実は僧伽をつくるほどの求道なんだと思います。

亀谷先生が回心のことをおっしゃって下さいましたが、やっぱり私もその通りだと思っただけです。何か回心というものを目標にした時に、どうしてもそこに一つの危険性というものが生じて来ます。言葉が足りなかったんだと思いますけども、回心という言葉があっても、そのことが何にも問題にもならないような聞き方で、本当に僧伽をつくっていくほどの求道の歩みになるのか、そういう問題です。

ですから、本物の求道者にならないければならないとか、僧伽をつくっていくかなければならないという話ではなくて、「求道者たらん」、「僧伽たらん」という歩みが今始まっているかどうかということだと思います。「私は本物の求道者です」など誰も言えないですよ。言ったら嘘ですよ。しかし「求道者たらん」と今立ち上がって歩みだすことはできるわけです。その時に、宗祖はやっぱりご信心が課題となられたわけですよ。そこにこそ全生活を上げてという仏道の歩みがあるのでしょうか。私たちにとってもそこが大事なだろうと。そこで立ち上がっていかなければ。我々はこれからも結局「宗祖の遺徳の上に安逸をむさぼって」いくのだと思います。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。亀谷先生、お願いいたします。

(亀谷先生)

「真宗寺院の本来性を回復すべき」ということは、真宗寺院ということでは、そこは「お寺は聞法の道場だ」ということでありますので、やはり聞法の道場であるという意味でお寺を回復することだと思えます。しかし、それはたんに、お寺にたくさんの人が集まって聞法するということだけではなくて、そこにどこまでも仏教と相応する、浄土論でいう『与仏教相応』ですね。それが要となるということだと思えます。仏教と相応するということは、浄土真宗で言えば南無阿弥陀仏の心にかなうということだし、それは先ほどのことと言うと、念仏の僧伽を求めてという歩みに立てるかどうか、その歩みが始まるということが相応ということの具体的な姿だと思えますね。ですから、私たちの僧侶の現場で言えば、報恩講も含めてお寺の仏事が南無阿弥陀仏を具現化するような仏事になっているかどうか、葬儀や御法事の場が、聞法の場という意味を持った葬儀法事の場となっているかどうか。

そして、ご門徒とのふれ合いは大切ですけど、そのご門徒とのふれ合いが「念仏の僧伽を求めて」という願いを失わないようなふれ合いになっているかということが問われているということですね。マンネリということでは、葬儀もご法事もずっと同じ内容でやっていますので、正直マンネリ化していくものはあると思います。私も実際そうです。しかし、よく言われるように、こっちはマンネリ化してもご門徒にとっては、一期一会の希有たる仏事です。そのことを改めて自らの宿題としていくためには、「これでいいのか」「これじゃダメだ」「もっとこうしなければダメだ」って自分の心をこねくり回しても、それなら結局は賢善精進ですから、そういうことではないですね。そこに向かう依りどころとして、やはり教えに聞く、本願に聞く、先達の導きにあうということが要となると思います。楠先生が言われたことに「月忌参りに行く前に、漫画の本とかテレビを見ていくのと、仏教書を見ていくのは違うよね」って言われて、「ええ、仏教書見ていくんですか」って言ったことありましたが、それは仏教書を読んで、気の聞いた言葉を覚えて、月忌参りで偉そうに教え伝えようということではなく、ご門徒さんと出会うときに、大切な一期一会の場を頂いているにも関わらず、「そのことを忘れていたな」「またお布施の回収の月忌参りになっていたな」「次のことを考えながらの素通りしていた月忌参りになっていたな」という気づきですね。それは教えの言葉に触れることによって「はっ」と気づかされる。それが、月参りの前に仏教書を読むことの大切さであるということだと思います。畠山先生は「一日一〇分でもいい、親鸞という名前がついた、釈尊という言葉が出ている本を読んでくれ」と、頭を下げて僕らに言われました。ちなみに、出会った頃は「一時間」って言われていたんです。一〇年ぐらい経ったら三〇分に、それが一〇分でもいいからと言われた。そこに私たちの墮落がある。それを見越して「一〇分でもいいから」と願いつけておられるのだと思います。その意味で、黒萩先生は先ほど「求道者たれ」とおっしゃいましたけど、「聞法者たれ」ということも忘れてはいけないと思います。月忌参りの合間に一〇分仏教書を読む、それも一つの聞法の歩みです。教えの言葉によって見失っていたことに気づかされる、マンネリ化していく自分の問題を教えられる。そこに立って葬儀とか法事に向かえば、そこが聞法の場になるということも、ありうるかもしれないですね。ですから、寺離れということで、形としてのお寺が消える危機に今、私たちは直面していますけれども、そのお寺が消える前に、お寺から教えが消えている。私たちの中に教えることが消えている。そういうことが、一番問題だと思います。本来性って、聞法以外のところにきつと、本来性はないと思



ます。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします。

（金石先生）

この設問は非常に難しく、回復ということは「失った事柄や状態をとり戻す」ということです。過去において本来性は保たれていたのだろうかというようなことを考えていたのですが、よく「昔は良かったな」という回想してみたいながあります。少なくともそういうことを問うていたのではないなということを思いながら考えさせていただいたことがあります。例えば同朋とか同行という関係は「生み出す」ものなのだろうか。今日も度々僧伽という表現が出てきますが、僧伽という関係は「生み出す」ものなのだろうか。これは生まれてくるものの状態であろうということを思います。宗祖は『御同朋御同行とかしぎて』と、こう表現されましたので、決して生み出したものにかしぎいたわけではないだろうと、生まれてきたものにかしぎかれたのではないのかなっていうことを思います。何が言いたいのかというと、我々の教団が、制度的に、組織的に、同朋、同行を生み出すとするならば、教えるものと教えられるものとの関係となってしまう。同朋会運動で言うと、育成員とか推進員という呼称もあります。教えられるものと教えるものという関係になってしまう。果たして、私たちのいただいている教えと、いうのは、教団の占有物なのだろうか、決して教団の占有物ではないはずであります。教えを利用する教団ならば、傲慢としか言いようがなく、おそらく人は離れていくのだろうと思います。ですから、教団に責任を負うものが率先して、教えに聞くことを忘れてはならないと思います。このようなことを、私は本来性ということと考えさせていただきます。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。中野先生、お願いいたします

(中野先生)

曾我量深先生は、私どもが正依の經典としていただく『大無量寿經』は、「聞」に貫かれた經典である」とおっしゃっています。またある人は、「真宗の教えを学ぶとは、耳が育てられるということだ」と言われました。「宗門、真宗寺院、教区の本来性を回復する」とは、まさに人が聞法者として生み出されること以外にないのだと思います。では、どうしたらそういう人が生み出されるのか。それはこれまで述べてきたように、私自身が念仏の教えに生きている人たちの声を聞き続けるという、人との出遇いにおいて他にないのではないのでしょうか。念仏の教えを聞き、喜び、それに生きている人と出遇う他に、私自身が念仏者として生み出され、聞法者として育てられることはないのだと思います。まさに「諸仏称名」「衆生聞名」です。

池田勇諦先生は、「仏宝・法宝を自らの生きる道としている人たちの共同体である僧宝、僧伽の存在にこそ、仏宝・法宝がこの世に生きてはたらいっていることを証しする唯一の事実である」と述べておられます。僧伽の存在こそが、現に仏法が生きてはたらいっていることを証する事実であり、そこに仏法との出遇いの具体性があると言うのです。安田理深先生は、「僧伽というところに生きた念仏がある」とおっしゃいました。では、僧伽に生きていることが如何にして自分自身に成り立つのでしょうか。それは、私自身が念仏の教えに生きる者となれるかどうかです。もちろん、自身に求道の志があるからこそ法に生きることが起こるのですが、それは自分の能力や努力によるものではないのでしょうか。親鸞聖人は、法然上人との出遇いを通して七祖と出遇い、同朋に遇い、さらには越後や関東に生きる人たちに遇い、そういう多くの人たちとの出遇いによって本願に遇いました。それが親鸞聖人の歩みだったのです。そういう意味では、教えを聞くことや課題を持ち続けることを本人の力量に求めない。それを頼りとするのではなく、人との出遇いを通して信心をたまわるのが真宗仏道の内実だと思えます。

教区の使命ということも繋がりますが、法と人、あるいは人と人との出遇いの場を開き続けることを願いとしているのが私どものお寺ですし、教区や宗門の使命でもあります。「諸仏称名」と「衆生聞名」という出遇いの場を開き続けるところに本来性の回復があるのではないのでしょうか。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。四人の先生方のご発言を受けて、何か思うところございましたら、ご発言いただきましたと思います。どうでしょうか、よろしいですか。それでは、最後設問四の③ということでお話をいただきたいと思えます。今の「宗門、真宗寺院、さらにつけ加えますと教区の本来性を回復すべし」とはいかなることかということをお話いただきましたけども、そういったこと含めて③「今、そしてこれからの真宗寺院、僧侶の本務」とは何かということでお話をいただきたいと思えます。黒萩先生お願いできますでしょうか。

### 設問四③【今、そしてこれからの真宗寺院、僧侶の本務とは何か】

(黒萩先生)

今日は同じようなことを繰り返し話しているように思いますが、ここで少し視点を変えて申し上げますと、真宗寺院と僧侶の本務はやはり教化でしょう。そして、世間が寺に求めているのも教化です。そういうことだと思えます。一昨日、教化本部の「同朋教化を考える懇談会」というところで話をさせていただきましたが、そこで申し上げたのは、人を救うのは如来だということです。私たちに人を救うことはできませんしそれは求められていないんです。このことをはっきりさせておくことは大事です。そうすると、そこで成り立つ教化とは何かと言うと、例えば、人生に行き詰まっている人に「ここに道がある」と指示し伝えることでしょう。そのためには、我々自身がその道に出会って、その道を歩んでなければならぬのでしよう。「ここに道がある、一緒に歩んでいきましょう」と、これが我々にできる唯一の教化なんですよね。そこにこそ真宗寺院・僧侶の本務があるのだと思えます。

こういう教化は、我々が仏道を歩んでいたら今すぐにでもできることなんです。今日ここに来る前に、一軒命日のお参りに行ってきました。札幌で美容室に勤めていた娘さんが、去年の夏にお父さんを亡くして今年になって地元に戻ってきました。お内仏の脇にお父さんのメモを額に入れて置いてあるんですね。「ごめんね、ありがとう、大丈夫だよ」これだけ書いてあるメモです。どんな想いで額に入れてあるのかなと思いつながら、「今度お寺に来てね」と言ったら、すぐに「今度いつお参りありますか」とこたえてくれました。こういうことが教化なんだと改めて

教えられました。

我々が「お寺参りしませんか」、「仏法と一緒に聞いてくれませんか」ということを言うのに何故躊躇するのかというと、それは我々自身が仏法と寺を信頼していないからなんです。我々自身が宗祖親鸞聖人の教えを信頼してないんですよ。私自身中々誘えないまま今日まで来てしまったような気がします。随分ご門徒の葬儀を勤めて来ましたが、「これを機会にお寺参りに来てね」と言えないまま来てしまいました。ご門徒の問題ではなくこっちが宗祖の教え、寺を信頼していなかったんです。そういう我々の問題を差し置いて、経済的に寺がこの時代社会を生き延びるために何かしなければならぬと、これは本末転倒なんです。我々にそういう発想しかなかった時点です。寺は死んでるんですよ。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。亀谷先生、お願いいたします。

（亀谷先生）

いつも黒萩先生の後なので「他にございません」と言いたいのですが、僧侶の本務ということで、内面的なことで言えば、最初に言った凡夫、悪人の自覚を持つ、そういうことが私たちに本当に求められているということですね。そのことで思い出すのは、教研五期の上山研修で同朋会館に行ったときに、仲野先生の最後のご講義でしたが、同朋会館の部屋にポスターが貼ってあったんです。あまり社会的なことについてご発言されない仲野先生だったんですけれども、人との関わりとか、同朋社会とか、僧伽とか、そういうことに話が及んだときに、ふとそのポスターに目向けられたのですが、書いてあったのが「お寺に来れば、大人も子ども」っていう言葉だったんです。そうしたら先生が「これだ、これに尽きるんじゃないか」こういうふうに言われたのは非常に印象的でした。つまり、僧俗の別を超えてですね、お寺に集う全てのものが、そこに身を置く全てのものが、凡夫、悪人という自分の事実立って、仏様、つまり親様たる仏様に導かれ続ける仏の子どもとなっていこうという、そういう視座を、私たち袈裟、衣、着ているものは特に見失ってはならないということだと思います。これもある先生の言葉ですが、「いのち」っていう

本の中に「子ども三帰依文」というのがありますよね。「私たちは仏様の子どもになります」という言葉ですが、では、その子が大きくなった時に、大人になったら、これはどうすればいいのか、仏様の大人になりますじゃあ……。すると、その先生が「それはね、仏様の大きな子供になりますっていうことなんだよ」って言われて、なんかすごいなと思いました。どこまでも仏様の子供として仏法を聞いていく、仏様の教えに導かれる、先ほど金石先生が「教えるものと教えられるものが別になってる」と言われた問題ですね。どこまでも教えられるものとして歩んでいくことの大切さ。そのことを私たちは見失っているということがあります。そういうところに、スタートラインがあると思います。先ほど黒萩さんが「お寺を信頼してない」「親鸞聖人を信頼してない」とおっしゃっていましたが、私たち自身がスタートラインに立っていない。そこにお寺に居ながら教えられなければならない子どもになれない私たちの中であって、「そうだったな」って領いたときに「だから一緒に聞こうよ」って言葉も出てくるのかなということを、お話を聞きながら思ったことです。確かに自我煩惱にまみれたプライドの高い私においては、子どもになるのは容易なことじゃないです。しかし、その一点に立たんがための戦いが、今私たちに求められているんじゃないかと思います。実は浄土真宗の寺院こそ、子どもに帰るのが可能な場所だということです。畠山先生が言っておられました。「門徒さんと一緒に仏法を聴聞するのが住職の務めですよね」って言ったたら、即座に「違う。ご門徒の先頭に立って聴聞するんだ」ということを言われました。ここに本務ということの核心が現れているんじゃないかと思います。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします。

（金石先生）

最近お聞きした言葉に「布施は僧伽に施されるのです」という言葉をお聞きしました。私は何かこう、法要に施されていくのかなとか、お寺や僧侶に施されていくのかなと思っておりましたが「布施は僧伽に施されるのです」と。非常に衝撃的な言葉として、聞かせていただいて、忘れられない言葉になりました。真宗寺院とか僧侶の本務

ということを考えるうえで、この言葉を今ご紹介したのですが、そもそも念仏の僧伽が教団を生み出し、支えてきたのであると思います。決して、教団が念仏の僧伽を生み出し、育てることはないと思います。そう思っているならば、傲慢というものなのだと思います。どこまでも念仏の僧伽に奉仕する、奉仕することが本務ではないのか、このように考えさせていただいております。アイヌ民族の結城幸司さんが「僧侶は職業じゃありませんよね」と、「僧侶は生き方ですよ」と、こうおっしゃってくださった言葉も、私は忘れられない言葉であります。その言葉を変えて考えたときに、では寺院というのはどうなのだろうか、僧侶が生き方であれば、寺院はあり方なのだろうかということ 생각합니다。どんなあり方なのかなって言ったら、やはり聞法道場としての寺院、そういったものが本務としてあるのだと思っております。

聞法ということをお願いします時に、随分前ではありますが、寺川先生が「なぜ念仏がわからない。それは聞法の不徹底さだ」と、こう厳しく教えてくださった言葉がありました。随分甘つちよろいところで聞いてきたのではないのかなということを変えて感じさせていただきました。本務に立ち返る、徹底した聞法というところに、身を据えていくということが本務と言えるのではないかなと、このように思っております。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。中野先生、お願いいたします。

(中野先生)

先ほどから申し上げている僧伽ということですが、僧伽そのものは和合衆のことであり、真宗の教えの上では佛法を聞く者の集まりという意味だと思います。この僧伽について私には宮城顕先生の、「念仏者の集まりを御同朋御同行というのではない。仏教というものを否定し、批判するものをも含めて、一切の人間を御同朋として出会っていきける。そういう精神のところに念仏者という姿がある」との言葉が思い起こされます。最初の言葉を「念仏者の集まりを僧伽というのではない」と読み換えることも出来るでしょう。これは以前、本山の同朋会館に掲げられていたものですが、私は初めてこの言葉を目にしたときは驚きました。私は単に、念仏者の集まりを御同朋御同行と

呼ぶのであり、僧伽も同じ意味として考えていました。しかし実はそうではなく、仏教や真宗を否定し批判する人も含め、一切の人を御同朋と見いだす智慧に生きる者を念仏者と言い、その仏智とともに生きようとする集まりをこそ僧伽と言うのでしょうか。

先ほど、親鸞聖人がうたわれた「三朝浄土の大師等」の「等」には、七祖のみならず越後や関東で出会った様々な方々を含んでいると申し上げましたが、その中には当然、仏法を批判する人もいたでしょう。特に当時の関東は呪術が盛んだったと言われていますから、批判の真っ只中にあるようなものです。宮城先生の言葉は、批判の声を上げる人も含めて御同朋として出会っていいける、つまり一切の人を御同朋御同行として見いだす智慧に生きるところに念仏者の姿があると言われているのではないのでしょうか。

ここで言う「否定し、批判する」人とは、宗祖が『浄土和讃』の冒頭に列記する中の「提婆尊者」と重ね合わせる事ができるでしょう。提婆達多は阿闍世をそそのかした人物ですが、親鸞聖人はその提婆を「尊者」としていただきます。釈尊の座を奪おうと画策し、阿闍世の逆心を起こさせた提婆を、浄土の教えが興る機縁となった人として「尊者」と呼ぶのです。そういう意味では、そう呼ばしむるはたらきに生きるのが念仏者であり、その教えをとくに聞くとともに僧伽があるのだと思います。

「これからの僧侶の本務」についてですが、以前、宮城先生がご講義の中で、曾我量深先生が「今の僧侶は問いを持っていない」と嘆いておられたことをお話されてきました。私はこれをお聞きして以来、浅薄な思索で答えを求め、それを握りしめてあぐらをかき、問い直すことのない自分自身を恥ずかしく思い、私を掴んで離さない言葉となりました。

先ほど亀谷亨氏から、畠山明光先生の言葉の紹介がありました。私も畠山先生から「答えに立つな、問いに立て」と叱正されたことを思い出します。これは「北海道教学研究 三〇周年記念誌」で、各期から一人ずつ執筆する中にある私の拙文の題名です。畠山先生は第九期教研で「答えに立つな、問いに立て」と、私の姿勢を見て指摘されたのだと思います。私は「答えに立つてはいけない」、あるいは「問いに立つことが大事だ」と、言葉を答えとして握りしめるだけで、問いに生きることが自らの歩みになっていなかったのだと思います。さらに言う、「答えに立つてはいけない」「問いに立つことが大事だ」と、それをまた答えにして握りしめてはいけないかと問うてください

るのが、宗門や教区、組、寺院での法や人との出遇いなのだと思います。

親鸞聖人は吉水での法然上人との出遇いによって、念仏の僧伽に生きられました。そして、越後、関東での生活の中で、御同行と念仏の教えとともに聞き、確かめられました。「念仏とは何か」、「人間とは何か」、「生きるとは何か」、「自己とは何か」という根本問題を如来の教法に聞きたずねられたのでしょうか。「これからの僧侶の本務」とは、念仏の僧伽の中で法を聞思し続けることだと思います。「聞思」は、「聞思して遅慮することなかれ」（聖典一五〇頁）という「総序」のお言葉です。金子大榮先生は「聞思」について、「真宗の聖典に対する親鸞の態度は、聞思ということである。聞は耳で聞くことであり、その聞いた感じを自分の生活に照らし、それを思うていくのが思である。聞は伝統であり思は己証である。『教行信証』は聖教に対する親鸞の聞思の書である」と述べられています。「聞」は法を耳で聞くことであり、「思」は自分の生活の中で思索することです。聞いた教法を生活の中で確かめる。法と人との出遇いの中で聞かせていただき、生活において具体的に確かめ、そのことを通してまた法に聞いていく聞思の生活が「僧侶の本務」なのではないでしょうか。一人では成し得ない自分が、僧伽の中で教えられ続ける大切さを思います。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。四名の先生方には大きな設問四として、真宗寺院、真宗僧侶の本務についてというところで、それぞれ①②③の設問を出させていただきましてお話をいただきました。以上を持ちまして、第一部ということで終了させていただきます。当初一五分の休憩予定でしたけれども、一〇分の休憩で第二部を始めさせていただきますと思います。それでは一〇分休憩させていただきます、五時二〇分より再開させていただきます。



## 第二部

### 設問一【教化本部発足当初三部門にかけられた願いとは】

（寺澤本部長）

それでは第二部ということで始めさせていただきます。今一度合掌していただきまして、お念仏申させていただきます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、おなおりください。それでは第二部ということで、第二部では開催趣旨②について懇談させていただきます。発足から二四年を経過した教化本部を点検精査していくための視点をいただきましたと思います。設問一ということで「教化本部発足当初三部門にかけられた願いとは」ということで進めさせていただきます。第一部で教化本部発足の理念については、すでにお話をいただきました。ここでは、第二の設問一として教化本部発足当初三部門にかけられた願いとはということでお聞きいたします。教化本部発足当初、それまでの教区教化事業を統一し、また細分化しつつ、現在の同朋教化部門、青少年教化部門、社会教化部門の三部門として新たに始動したとお聞きしております。本部発足当初、同朋教化、青少年教化、社会教化の各部門において、具体的にどのような活動指針や願いを持たれていたのか。特に重要視されていたことがございましたらお聞かせいただきたいと思います。また、教化本部発足前後の様子や、現在、そして、これからの担い手の方々に知っておいていただきたいことがございましたらお聞かせください。この設問に关しましては、教化本部長を歴任されました、黒萩先生、そして金石先生にお話をいただきましたと思います。それでは、黒萩先生からお願いいたします。

（黒萩先生）

随分前の話になりますが、教化本部発足当初は教化事業の内容は自分たちの発想で色々考えていったんだと思いますけども、組織形態は、教化委員会の時代からのものをおおむね引き継いでいったのだと記憶しています。それが教化本部の出発点だったろうということをおもいますね。ただ、これからの教化本部ということでは、私は皆さんで考えてもらいたいと思うのは、教区教化委員会というものができたのは、昭和四二年なんです。で

すから、教区教化委員会の歴史は同朋会運動が発足した後のことで、そんなに古いものじゃないんですよ。四組の島松寺の吉田法純さんに教化本部でインタビューしたことがあります。教区教化委員会が設置される以前はどうであったかと言うと、心ある有志の人たちが手弁当で、全道各地から集まって教区の教化ということを議論していたということですね。当時は教学委員会と言ったそうですが、最初は手弁当で始まっているんですよ。それが教区教化委員会が設置されて、やがて旅費日当が出るようになり、全道各地から多くの人材が教区の教化にかかわれる体制が整えられていったのだと思います。もう一つ言うと、教化本部が発足して部会員以外の常任本部長・部会長には旅費日当の他に報酬が出るようになった。

ここに教区教化にかけられた願いと長い歩みがあるんですね。このことは非常に重たいことです。ですから、私は教化本部に関わった時にこれは大変だなと。いただいた報酬を仕事で返していくというのは大変なことだなというのを先ず思いました。私は教化本部発足二四年を迎えようとしている今、この旅費日当、報酬ということを当たり前だと思っはいいかんと思っはいいですね。やっぱりそこに、教化本部を立ち上げて下さった方々の大きな願いを感じてほしいと思います。旅費日当、報酬ということが当たり前ではなくて、そこにかかけられた願いに見合った仕事を精一杯させてもらおうという緊張感をずっと持っていてほしいというのを思います。当時の個々の事業については、特筆すべきところはそうないのですけども、例えば、社会教化部門というと、以前からの本山の施策でありました靖国・部落差別問題はそのまま引き継がれました。以前の名称は、靖国問題対策協議会・同和問題対策協議会でした。「対策」がついているんですね。いつ頃この「対策」という文字がとれたのか定かではありませんが、靖国と部落差別問題は宗門にとって二本柱ですから、我々はこれからはずっと関わっていかねばならない課題です。何年経ってもこの二つの問題に関しては我々は加害者です。この靖国・部落差別問題を通して我々はこれからも信心を厳しく問われ続けていくんだらうと思います。「対策」という文字がなくなったということは、靖国・部落差別問題が私の問題であるという受け止めによるのだと思います。大事なことだったと思います。社会教化部門でもう一つという教化本部が立ち上がったことで、アイヌ差別問題も我々北海道に住む者にとって避けられない課題として取り組み始めたことが、大きなことであつたと思います。

あとはですね、これはその教化本部が立ち上がったことと直接関係はありませんが、当時、寺族部門って言って

いましたが、「育成員の集い」という研修会が毎年開催されてきました。宮城先生が来られるということで、年配の御住職も真宗聖典をもつて全道各地から集まって来ていました。その他に四地区で寺川先生が来られて一泊二日で「教学講座」も開催されてきました。その時も真宗聖典を持って年配の方もたくさん参加しておられた。これは我々今の年配者の問題なんですけども、何かそういう教区の空気がいつのまにか失われて来たなど、教区の研修会は若手が参加すればいいという意識がどこか我々にあるのだと思います。教区の教化が振るわないということに関しては、我々年配者も含めて教区人一人ひとりにも原因があるのだと思います。

もう一つ付け加えますと、これは後ほど申し上げますけども、教化本部が発足したということは、事業計画から予算案の作成まで全て自分たちの手で行うということです。それ相応の責任がそこに生じているということです。そういう重い責任を担っているということ、私は教化本部の方々はやっぱりもう一回それぞれ確認してもらいたいなということを思います。設問の答えになっているかどうかわかりませんが、以上です。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします。

(金石先生)

教化本部が発足された当初、私は青少年教化を担当というか、そちらの方から関わらせていただきました。その前身たる、教化要員時代から青少年教化に携わらせていただきましたが、その教化本部の発足の青少年教化要員の研修事業が概ね引き継がれるような状況下の中で始動したということ覚えておりますが、その時になんて言うのですかね、厳しくというかですね、発足当時の常任本部長の方に、ただ教化要員時代の研修事業を新しい本部にスライドさせるのではなくて、しっかりと考えて事業整理をしてくれということ、随分きつく、厳しく言われたのを覚えております。それは他部門もありますし、予算ということもありますし、自らがしっかりと事業計画と予算化していくというこの責任というものをよくよく考えてくれという、こういうメッセージでなかったかなということをお思います。ちょっと話は戻るのですけれども、その青少年教化がある意味ですね、どこで転換期を迎えたか

という二つくらいあったかと思うのですが、その青少年教化要員時代に青少年教化とは何かという、そんなに難しいことを語り合ったのではなくて、要員の方々が、是非ともお預かりしているお寺で子ども会を開設してくれと。こういうことに尽きていたなということがありました。そして、ただ子ども会をやるというわけにいきませんので、その手順であるとか、手法であるとかっていうものを教化要員の中で、今でいえば「担当者研修会」のよいうなことを行うのでありますが、概ね一泊二日で古い研修センターで行われていたことでありますが、まあ、やはりそこにもマンネリ化があったのだと思うのですけども、その一泊二日の研修で初日夕方ぐらいからですね、十数名の人たちが、教化要員が集まってくるのですが、研修をして一杯飲んで次の朝になるともう二三人しか残っていないというような、そういう状況でありました、実は、その中で課題提起されたのは、ちょうどセンターの改築というお話も浮上していた時でありまして「こんな状況の中で新しい研修センターが必要なのか」というようなことが話し合われて、いたくそこに衝撃を受けました。その時に青少年教化ということの本当に考えていかなきゃならないということが始まったのではないかなということをおもっています。そして、教化本部が設立されて、概ねスライドといいながらも事業整理をして出発していくわけでありますが、当時考えていたのは、いわゆる教区で行う教化事業ですね、教化事業を通じて各組であるとか、各寺院にその手法であるとか願いというものが、波及し広がりを持つていくということを大きな願いとして進めていたかなということをおもいます。裏話をしますと当時は、各組の組長さんであるとか、教化委員長さんっていう方たちが「うちの組にこういう若い子がいるから、ぜひとも青少年教化に加えてくれ」という、こんなお話も時折いただいていたことでありましたが、それはですね「いい子がいるから、ぜひ使ってくれ」ということではないのですね。このまま放っておいたら孤立してしまうから、なんとか教区の青少年に入って、一緒に教化事業に携わってほしい、こういう願いであったかなと思います。つまり、その青少年教化のちよつとした裏にはですね、この教区内にあって、孤立する人を少しでも少なくしていこうと、そういう願いがあったかなということをおもっています。それと具体的な研修事業としては、教化要員がそもそもお預かりしているお寺で子ども会をといてほしいがあります。それと具体的研修事業としては、教区としましては各地方から研修センターに集まっていたり研修とそれともう一方では「出前」と言っていました。現地に赴きながら、研修、子ども会等が運営されていくことを願って行ったかなと思います。おそらく二期目だったと思いますが、この時に青少年教化が青

年と少年に分かれたかと思えます。これは当時から、ちょっと衰退しておりました、青年を対象にした研修事業をしつかりとやっていかなければならないという、そういう目標を立てまして青年担当というものを分けて実施していったかなということをお願い出されることであります。それと最後ですが、この青少年教化は、これはあまり共有されていないのですけれども、私も長く関わってきて、言葉として引き継がれてきたのがひとつありまして、それは教区の青少年教化は、関連学校も視野に入っているのだということでありました。私たちはお寺とか、組であるとか、そういったところで青少年教化というものを考えてまいります、やはり関連学校ということも、実は青少年教化の大きな視野に入っていたのだと。これはなかなか具現化されることは叶っておりませんけれども、そういった願いはずっと残されているのだということは、どこかで思い起こしてやっていただけたらなということをおります。以上です。

## 設問2 【教化本部のこれまでの歩み（課題）】

（寺澤本部長）

ありがとうございます。それでは引き続き設問2ということで、教化本部のこれまでの歩み、課題ということ、教化本部のこれまでの具体的歩みや課題について考えていきたいと思います。教化本部が発足して八期二四年が経過しました。組織体制を振り返ってみますと、発足当初からの（同朋教化・青少年教化・社会教化）の三部門という大きな柱は変わらなはなりましたが、少年部会と青年部会に部会を分け、世代を明確化した教化。推進員部会の廃止や研修部会・企画部会の発足。社会教化を担う班の増加、社会教化部門の実行委員の人選方法を組の推薦から本部による選任への変更。教区ホームページの運営などを行う広報の拡充など、様々な改編や拡充が行われてきました。また、宗祖七五〇回御遠忌の時期には、宗門や教区の諸事業の数や予算を鑑みながら、教化本部の事業を立案し、教化本部員、教務所員の方々と教区人の方々が共に協力をしながらいくつもの事業に対応にされていたと記憶しております。それらは、その時々々の教区教化の課題に応じての改編と拡充、対応ということだと思います。そこで、その時々々の教区教化の課題を教化本部長としてどのように感じ、どのように重要な課題として掘り

起こし、それをどのように考えておられたのかということ、黒萩先生、金石先生にお聞かせいただきしたいと思います。そして、当時考えられた課題を今どのように、また改めて思われるかということ、いくつかお聞かせいただければというふうに思います。それでは黒萩先生、お願いいたします。

(黒萩先生)

四点ほど申し上げたいと思うんですが、一つはですね、北海道教区で教化本部が立ち上がったのは京都教区に続いて全国で二番目でした。ですから、みんなが手探り状態であったということを思います。教化本部が発足したということは、平たく言うと金と人事権をそこにあげるといふことなんです。そうすると、当然そこまで権限を教化本部に与えていいのかという心配の意見が、発足当初非常に根強くあったと思います。そんな中教化本部が立ち上がったっていったんですね。当時心配された方々の気持ちはよくわかるんですね。これから本部がどういう形をとるのかわからない中で、金と人事権をあげてしまっただけでどうなるのかと。教化本部自体がセクト化していくんじゃないかと、仲良しクラブになっていくのではないかと。そういうことを心配されたのは、私は無理はなかったのだと思います。それに対して「そうではありません」、「セクト化することはありません」、「仲良しクラブにはなりません」ということを本部の活動で証明していかなければならない。そういうことは思っていました。

もう一つ言うと、教区内のそういう心配の中期二期の本部長と常任本部員は報酬とすることをきちんとしていたんです。自分たちが金が欲しいということではなくて、教化本部がいよいよ充実して永続していくことを願っているのだと思います。そしてそこに心配しながらも当時の教区会がそのことを認めてくれたということがあります。教化本部の報酬の重さはそのにあるんです。色々な人の努力と願いで現在の教化本部があるということは忘れてはならないことだと思います。また当初心配された「セクト化する」、「仲良しクラブに陥る」という危険性は教化本部はいつでもかかえています。そのことは本部員は常に頭においておかなければならないと思います。

それともう一つは、教化本部と駐在教導・青少年指導主任との関係です。それはどうということかと言うと、駐在教導がいて、青少年指導主任がいる中に教化本部が入って来たという話なんです。ですから、駐在教導と青少年指導主任の方が早いです。そういう問題が教化本部にはあるんです。任期中私は、我々教化本部員がいるこ

とによって、駐在教導と青少年指導主任の仕事を奪っているのではないかと、そういう思いがずっとありました。そしてこの問題をどうしたらいいのかっていうことは、ずっと考えていたような気がします。結論を言いますと、同じところに立って同じ仕事をするということなんです。語り合って同じように汗をかいていくということなんです。そこに上下はないんです。そういうことで超えられるものなんだと私は思います。何かこういうことも教化本部員には考えてほしいと思うんですね。全国的に見るとね、駐在教導が潰れいく教区が結構あるんですよ。我々の宗門には、教化に携わる大事な若い人材をつぶしていくようなところがあるんです。それだけに、教化本部と教務所の教化パートとの関係を大事に考えていってもらいたいなということを思います。

それと、教化パートだけじゃなくて他の教務所員とも一緒に仕事をしているという感覚をどこで持てるかということも大事だと思います。当時教務所にいた所員と本山であったり、他の教務所であったり、電話で話したりするとやっぱり懐かしいんですね。それは一緒に仕事をしたからなんです。基本は人間関係なんです。もったいないですよ。我々は自教区しか知らないんです。我々が本山や他教区の情報を聞けるのは教務所員を通してなんです。北海道は広いですが、ある意味では井の中ですよ。我々は常に本山や他教区の情報にふれて、教区がどうあるべきかを考えて行かなければならないと思います。私は幸い教化本部と教区御遠忌委員会で多くの教務所員と出会わせてもらったなと思います。教務所というところ集まっている人間同士が、どこかで出会っていける場を模索していかなければならぬだろうと、こう思います。そういう意味では、教務所は僧伽という意味をもたなければならぬのでしょう。教務所と教化本部が縦割りの関係になってしまったら仕事はできないのではないかと思います。最後にもう一つ言うそうですね、みんな教化を大事に考えているので、教化本部の立てた予算案は学事でも教区会でも教区門徒会でも大抵そのまま通してくれるんですね。それだけに教化本部自身が教区の実情を把握しながら緊張をもって予算を組んでいかなければならないと思います。その時ベースになるのが前年度の予算なんだと思います。変な話ですが、教化本部の仕事は一生懸命にやればやるほど事業が増えて、予算が膨らんでいきます。教化のことは通るだろうという安易な考えではいかんのだと思います。前段で申し上げた、金と人事権をあげられるということの責任の重さということです。マンネリ化ということは、本来廃止あるいは見直すべき事業をそのまま続けているということですから、予算の面からも気を付けなければならぬと思います。教化本部は予算について

他から言われるようでは駄目なのだと思います。教化本部自らが自分たちを律していくことが大事ではないかと思えます。私が教化本部に関わっていたころは、教区のお金の流れが今よりも潤沢でしたから心配ありませんでしたが、これからは徐々に厳しくなっていくのではないかと心配しています。

（寺澤本部長）

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします。

（金石先生）

私は教化本部における第五期から本部長として関わらせていただきました。これは一部でも申しましたが、二〇一一年度から本部長でありますから、その直前に七五〇回御遠忌が勤まっておりますが、この時期は、皆さんご存知のように東日本大震災が起こったときであります。

就任する直前、まさに、あの大惨事が起こりまして教化本部そのものを始めていく上で、その被災者、そして原発事故等が、どうしても頭から離れないというか、そのことを抜きに教化本部ということがスタートを切れないという、そういう強い思いがありました。当時の教務所主事等々と色々打ち合わせをしながら何を始めたかというところ、門徒会の方々にも参加をいただいたかなと思いますが、学事教務委員の皆さんとですね、研修をまずもって行ったということがあります。そこで確かめられたのは、被災者支援と原発問題に対する学習ということが決められて、そのことから第五期教化本部が始まっていき、ずっとそのことを課題にしていたかなということだと思います。その後ですね、五期、六期、七期と教化本部をさせていただきますが、その間に胆振東部地震ということもありましたし、七期終了間際はコロナ禍が始まったという意味では、災害人災、そういったものの中に教化本部をお預かりしていたという実感があるのですけれども、そうするとですね、私たちは教化のために計画を立案して、それを予算化して実行していくということは、被災者支援とかですね、従来の事業化されたものから何かこう逸脱していると思われることって、とてもやりにくいことではないのかなと思うのですね。だけど、何かそこに画一化されたものの中に、狭さとかですね、閉じこもっていくような、そういう感覚を自分の中に非常に感じたということがありま



した。世で起こっていること、引き起こされていることを抜きに、教化本部ということはないのだということを感じる。私自身はそういったことをもって、教化本部をスタートさせてもらったかなっていうことを覚えておられます。おそらく私の中で重なっているのですが、こういった教団において教団全体から見ても教区というのは、いわゆる中間的な位置に設置されますので、そういう意味では、その体制そのものが磨かれ研鑽学習していくという「ポンテイング」は当然大切なことであります。もうひとつ大切なこととして、異業間交流と言ったらわかりませんが、違う組織と接点を持って橋をかけ交流していくということ。「ブリッチング」と呼ぶのですが、例えば死刑制度班が、札幌弁護士会と繋がっていくというのは、これはブリッチングという手法でありまして、実はそういうことが有効であるという以前に、教化本部面白いなと思ったのは、死刑制度というものを考えていくうえで、やはり問題意識を同じくしていく人たちと橋をかけて交流していく。その中で自分らの課題というか、問題を整理していくという、こういう歩みをされていったというのは、非常に大事な取り組みだったかなということを思います。ポンテイングとブリッチングという取り組みが、次から次に行われているということは大切なことだなということも思っています。私自身、明確なものを持って始めたわけではなかったのですが、現実の引き起こす問題に對峙していく時に、寧ろそこに応じて現れて出てくるような、そういうこともあるのだなっていうことを学ばせてもらったなっていうことを思っています。以上です。

### 設問三【今後の本部に願われていることについて】

(寺澤本部長)

ありがとうございます。続きまして、最後の設問になりますけれども、設問三ということで「今後の本部に願われていることについて」ということでお話をいただきましたと思います。藤田本部長は、二〇〇二年度 教化研修基本方針の末尾、次のように述べられています。

『北海道教区にはおよそ四八〇カ寺のお寺があり、その数だけ住職さん坊守さんがおられます。そしてその一人一人の住職が様々な地域事情を抱えながら「教化」を課題として日々ご苦労され精進されております。この中の誰であろうと、だれ一人として「教化などどうでもいい」と考える住職はいないということだけは、共通認識として共有しなければ、教区教化委員会・教化本部は全く意味をもたないと思います。』

教化本部発足にあたり、教区内寺院から賛同や批判を含め様々な意見が交わされたことは伝え聞いております。この文章はそのことに思いを寄せての藤田本部長の言葉だと推察します。私は、この言葉を聞いたときに、全教区人の教化に対する願いを軽んじることなく、丁寧を受けとめ、よく考える本部が願われているということを感じました。また、それは教化本部だけではなく、教区のあらゆる組織がそのことを忘れてならないということを感じました。最後に、設問三といたしまして、この藤田本部長の教化研修基本方針の言葉について思うところをお話いただきたいと思います。もう一つ、最後に、今後の教化本部について願うことをお聞かせいただきたいと思います。最後、四人の先生方にお話をいただきたいと思います。中野先生、金石先生、亀谷先生、黒萩先生の順でお話をいただきたいと思います。それでは中野先生、お願いいたします。

(中野先生)

藤田本部長が二〇〇二年度に出された「教化研修基本方針」の中で、「一人ひとりの住職さんが、どういう姿で日々の生活をしていようと、その底には必ず願いがはたらいているということを見通せないのなら、それは我々の怠慢ではないか。教化本部を応援して下さる方も、逆に我々を批判し、非難をされる方もおられます。非難をされますと、私自身その非難を受け入れることはなかなか困難でありますし、反論をしたくなります。しかし、それでもなお、一人ひとりの住職を信頼していくことを放棄してはならないと思います」と述べておられます。「一人ひとり

の住職を信頼していくことを放棄してはならない」とありますが、「一人ひとりの住職を信頼」する内容が、この文章の前にあります。「教化などどうでもいいと考える住職はいない」ということだと思えます。

また、「一人ひとりの住職さんが、どういう姿で生活をしていようとも、その底には必ず願いがはたらいっていることを見通せないのなら、それは我々の怠慢ではないか」との言葉は、「どういう姿で生活をしていようとも、その底には必ず願いがはたらいっている」に大切な点があるのでしよう。それを、『一念多念文意』の「異学別解」（聖典五四一頁）から考えてみたいと思います。「異学」は第一九願の心を、「別解」は第二〇願の心を具体的に表しています。最初にも申し上げたことですが、「別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり」（同前）の言葉は、日々の生活は「念仏をしながら、自力にさとりなす」（同前）、つまり第二〇願に立っていることを教えてくださったのでしよう。「他力」という如来の本願に生きるのではなく、念仏を申しながらも自力に生きているのが、私どもの日々のありようだと言うのです。

宗祖は、いわゆる三願転入の文に「特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり、速やかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲う」（聖典三五六頁）と述べておられます。そこには第二〇願「果遂の誓い」（同前）が建てられた所以を知らされた、宗祖における第二〇願の自覚があります。「選択の願海」たる第一八願に転入するならば、どんな人も必ず目覚める者となる。如来の教法を聞き、必ず真実に領き、また自己に領く者になれという願いが、「どういう姿で生活をしていようとも」如来からかけられている。もし、そのことが共有できないなら、それは教化本部に携わる人たちの怠慢ではないかと。もう一つ言うと、如来はどんな者をも教化し、真実に生きる者になれと願ってくださったことを共有することが、「一人ひとりの住職を信頼していくことを放棄しない」具体性なのだと思います。そのことを、教化本部に関わる一人ひとりが、宗祖の歩みに学び教法に聞きたずねているのか問われているのではないでしようか。

教化本部における施策等に関しては、時代の状況に応じた様々な取り組みがなされていると思いますが、決して施策を立て研修会や学習会等を実施することだけが本部の仕事ではありません。そこに携わる一人ひとりが念仏者たり得ているか、聞法者たり得ているかを教法に問い、聞き、それを学び合うことが願われていると、最後に申し上げさせていただきます。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。金石先生、お願いいたします。

(金石先生)

この頃は先程言いましたように青少年教化をお預かりさせていただいております。変な話し、やるべきことをやって評価を受ける。こういうことばかり考えていたような気がします。そんな時に藤田さんの「教化などどうでもいいと考えている住職はいない」という言葉に解きほぐされたような気がいたしました。実はこの言葉は、この基本方針で初めて読んだのではなくて、これは藤田さんが発足当時に常任本部員さんたちと打ち合わせを重ねる中で、繰り返し言っていた言葉であったと。そのことを当時常任本部員だった方から聞かされて、私たちが勝手に縛りを作って縛られ続けていた思いから解きほぐされた。そんな言葉でありました。とても勇気とか力をいただいたなということ覚えております。もうひとつ思い出すのは、当時よく言われたのが「やりたいことやりなさい」ということでありました。その言葉も、これはとりとめもなく、非常に難しいのでありますが、「仕方なくやるならやるな」と。「やりたいことやれ」と。それが力の出ることなのだと、そういう意味だったと思います。ただ、本部に関わらせていただくならですね「やりたいこと」というのは、寧ろ責任が伴っていくと思います。やりたいということの根拠付けですね。予算、そしてそれをお認めいただいたとしたならば、そこから約束が発生します。破ることのあつてはならない約束だと思います。やりたいからやるのだというだけではなかなか済みませんけれども、やらせていただくならば、その約束を果たしていくという、そういう責任が発生してくるのではないかなということをお思います。つきましては、教化本部に願うことは、是非ともやりたいことをやっていたきたいなということとです。ただ、そこには責任と約束が交わされるのだと。その約束は、簡単に反故にしたいいい約束ではないのだということを肝に命じていかなきゃいけないだろうなど、このように思っております。以上です。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。亀谷先生、お願いいたします。

(亀谷先生)

教化などどうでもいいと考えている人は一人もいないということで、先ほどから話し合われているのですが、末寺の住職としてそう見られている側としてはですね、私ももちろんどうでもいいとは思っていませんが、しかし、自分の力不足や、地域の問題や、時代の状況の中で、教化に対しての意欲が薄れるというか、歳もあるんでしょうけども、心が折れそうになるということも度々あります。法務だけしていればいいのじゃないかと逃げたくなることも多いんですよ。もしかしたら、そういう悩みや辛さを抱えておられる住職も結構多いんじゃないかなと思ってます。実際、そういうものを抱えながらきた私ですけど、そういう中で私を導いてくれたのは、やはり同じような状況の中で頑張っておられる先輩や、仲間や、ご門徒たちの姿でありました。そういう方に導かれて「ああ、そうじゃないんだな」と、一歩でも半歩でも、それこそ「共に」というか、そういう願いを持ちながら歩むことの大切さを教えられて、歩みを進めてこられたのだと思います。そして、そういう人たちの出会いを開いてくれたものひとつが教区という場でした。教研も含めてですけども、教区が主催した研修会などによって、たくさんの人との出会いを可能にしてくれた恩恵というものを感じることです。その意味では、住職、坊守、若さんも含めて、お寺に身を置いているものが、多くの人と出会いやすい環境、出会えてよかったなっていう場を調えるのは、やはり教区じゃなければできないことはあると思うんです。教化本部には、それをなんとか進めていただきたいなと思います。もう一つ、教化委員会もそうですし、教化本部の皆さんもそうですが、皆さんもお寺に帰れば一人の住職、一人の若さん、一人の坊守さんということですから、やはり、いつも自分が身を置いているお寺の現実、そして我が身の抱える問題、一番は信心の問題ですけども、そういうことを自分の宿題として背負いながら、教化本部の活動とということに関わり続けていたかと思えます。それは私自身の反省でもあるのですが、どこかの場に出向いて自坊から離れちゃうとそれを忘れちゃって、何か「やっている感」の中でわが身の問題が見失われるってこともあるんです。皆さんはないかもしれませんが、私たちのもっとも現実的な教化の場は自坊だということをお参りが大事だと思えます。今日、お兄さんが高校の先生で、弟さんが社会福祉事務所に勤めている人のところにお参りに伺ったのですが、今、子供さんを取り巻く環境が大変だと、子供がまともな教育を受けるそもその環境が整っていないと言っておられました。社会福祉事務所の人は、ある高校では身寄りがなくて生活保護を受けながら高

校に行っている生徒が三人いて、それを支援するのが大変だと言われていました。高校の先生の方はヤングケアの問題でした。親を介護しながら大変な思いで健気に高校に通っている、その子を何とか卒業まで支えてあげたいということを真剣に語っておられました。まさしくそういう時代の中での教化事業ですね。そういう厳しい時代の中で、その時代を背負った教化事業ということも考えなければならぬのももちろんです。けれども、逆に、それだけに眼を奪われて、教えを共に生きることが疎かになる。それもまた問題だということです。金石さんが被災者支援ということで、色々とお悩ましいものがあつたとおっしゃいました。これからそういうことも多くなってくると思っています。そう意味で私が教えに生きているか、生きようとしているかという根源的な問題に帰っていくのでしょうか。『今生ゆめのうちのちぎりをしるべとして、来世さとのまえの縁をむすばんとなり』と『唯信鈔』にあります。『私たちは夢のうちのちぎりの中で、いろんな問題を抱えながら、そこであつぷあつぷしているのが現実ですが、それ全部が覚りのまえの縁といただけるかということですね。そのことがあつたから、私は教えに目覚め、教えに生きる事ができたんだ。色々な関わりを通して、私の目覚めが願われているんだ。そういうことを共なる課題として活動することの大切さを思います。もちろん、自分もです。以上です。』

（寺澤本部長）

ありがとうございます。黒萩先生、お願いいたします。

（黒萩先生）

私は教化本部が発足した後で教化本部に関わった人間です。ですから教化本部発足までの当時の参事会・組織拡充委員会の方々のご苦労や、心配して危惧しながらも最終的に教化本部発足を認められた教区会の方々の思いを本当のところはわからない人間です。それだけにどんなに時代が変わっても、その時々々の教化本部員は発足に関わった方々のご苦労と想いを常に憶念していかなければならないのだと思います。私自身も教化本部発足までの歩みを今回改めて考えさせてもらいました。

もう一つは、教化本部と教研は車の両輪だということが、本部長の言葉の中にあつたと思うんですけども、最初

ですね、「分かってても、分からんでも念仏しなさい。そして、念仏から教えられていきなさい」という信國先生の言葉を紹介しましたが、この念仏のところに「教化」という文字を入れると、もう一つはつきりすると思うんです。「分かってても、分からんでも教化に携わっていきなさい。そして、教化から教えられていきなさい」とこうなりませぬ。教化に携わる人間は、教化に教えられ、教化に信心が問われていくという歩みが始まっていかなければならないでしょう。どうということかというのと、本願も信じていなければ、お念仏も信じていない。そうとしか言いようのない私が、教区の教化という場に身を置いている。そこに、自分自身の求道の姿勢が暴かれていく世界がある。そこに立ったら、もう仏法を真剣に尋ねていかざるを得ないんです。まだ教研に入っていない人たちにとつたら、もうどうしても教研行つて学ばしてもらわなければということになるはずなんです。教化の現場が教学の学びに向かわせる。逆に、教研で学んだ者にとっては、いざ教化の現場に立つてみると自分の学びというのが、誠に御粗末なものであったということがまたそこで暴かれていく。何かそこに教学と教化がお互いに照らし合つて、人を生み出して育てていくようなところがあると私は思うんです。教化さえやつておればいいと。教化に関わることの一歩危ないところは何かをやっている気になってしまうということです。実は何にもしていないんです。そこに正直に立たされたらもう教えに助けてもらおうしかないんですよ。そういう意味では、出来得るならば若い人には教研・教化本部両方に関わってもらえたらと思います。

最近気になっていることですが、教化本部員でありながら、対象になつてる研修会があつても参加しないということがあると思うのですが、何かそこに一つの問題を感じます。教研生であつても、教研に入つたらもう教区の研修会にはいかなくてもいいということになる。何かそこに教区の教化がもう一つ振るわないという原因の一つがあるように思います。若い人がというよりも、自分自身にも言つてるようなところもありますが、さつき、かつては年配の方々が聖典を持つて研修会に集まつてこられていたと言いましたが、教化本部員も教研生も年配者も教区の研修会にそろつて参加するようになった時、教区の空気が随分変わつていくのではないか、そんなことを思います。その時、教化本部の中にもつともつと緊張感が生まれてくるのではないか、そして教化本部の中で、人がどんどん生まれていくんだろうと。私はそういうことを期待して信じてます。

(寺澤本部長)

ありがとうございます。以上で第一部、第二部の懇談を終了させていただきました。本日お話を聞かせていただきありがとうございます。私自身は二二歳の時に母親の実家の寺に入寺をしました。僧侶の友人や、知り合いが一人もない中で僧侶の生活のスタートを切りましたけれども、すでに準備されていた教化本部ですとか、研修会ですとか、教研も含めまして、その中で色々な人に出会わせていただきながら、多くの大事なことを教えていただいた、本当に沢山の教区の恩恵を受けてきた一人であります。現在も私が自坊という一カ寺で生活をしている際に、自分自身の歩みというのを、教区で出会うことができた多くの方々の声なき声が、「今のあなたの仏道生活、歩みの姿勢はどうか？」と正してくれるんですね。教区で出会わせていただいた、先生、仲間、一緒に教化事業に取り組んでいる人たちの顔と言葉が思い浮かんで、私自身の姿勢を直し、歩みを問うてくる、そういう恩恵の中で、一カ寺という現場で踏ん張る力、歩む力をいただいているなっていうことを、本当に生活の中で実感します。そういう意味で、これまで長い間交わりを持たせていただき、ご指導を頂いております本日の先生方の様々なご発言を聞かせていただきながら改めて思いましたことは・・・、現在一緒に仕事をしている教化本部員の人たち、また様々な教区の方々、そして、教務所員の方々と、胸襟を開いて教化事業に取り組むことの大切さです。つまり、教化事業を通じて、教を学び、座談、談合という形で色々な言葉を交わしながら、問いを見出し、課題をいただき、共に学びあっていくということが、仏道を歩むということの内容であり、仏道生活の「いのち」なんだなっていうことを感じさせていただいたことでもあります。本日は予定時間を超過いたしました。先生方には大変お忙しい中、設問を事前に送らせていただき、お考えいただきました中で、お話をいただきましたことを心から感謝申し上げます。ありがとうございます。それでは、進行の前田総務の司会で閉会式をいたします。

(前田総務)

長時間にわたりました、ありがとうございます。教化懇談会閉会にあたりまして、北海道教区会学事教務委員長、伊藤秀様よりご挨拶をいただきます。



## ○北海道教区会学事教務委員長挨拶

(伊藤学事教務委員長)

それでは、ご挨拶をさせていただきます。

本日は皆様長時間にわたりまして本当にお疲れ様でございました。私も今年、年が明けまして、教区会議員選挙において四期目の当選をいたしました。学事教務委員会配属になりました委員長を仰せつかりました。それで、本日は臨席をさせていただきまして、本当にたくさんご教示をいただいたことでございます。第八期教化本部の皆さんにおかれましては、このように最終年度において四人の先生方の貴重なご意見、そしてご教示を基にして三年間の総括をされようということに対し、誠に敬意を表するところでございます。

私もお聞かせをいただき誠に身に堪える痛い言葉がたくさんございました。そのうえで振り返り考えてみると「点検」という言葉が私の頭の中に出てまいります。自分の歩み、あり方の点検をどこで行っていくのかというと、それはやはり如來の教法であり、そのことを外してはならないなど。また亀谷先生のお話にございました「ランプの火屋（ほや）を磨くのが教学だ」という宮城先生のお言葉を思うに、我々が物事を行っていくには組織という形を取らねばならないが、その組織が組織を守るようなことだけにならないように、教法ということがある。そこにいつも帰っていく。確かめていく。そこに私たちは額ずいて、軸足を置いて活動していかなければならない。それが教団に身を置く、衣、袈裟をつけているものの大事な責任としてあるのかなということを考えさせていただきます。

この七月には教区会がございます。色々なことを決定していく中で、今日お聞かせいただいたことを胸に置きながら、肅々と次年度に向けて歩ませていただきたいなということをおもっております。最後になりましたが、本当に四名の先生方におかれましては長時間にわたりましてのご教示、誠にありがとうございます。簡単ではございますが、以上を持ちまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございます。

(前田総務)

ありがとうございます。それでは最後に恩徳讃をもって終了いたします。御一同さまに合掌ください。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏：：恩徳讃：：南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、どうぞ、おなおりください。以上を待ちまして、教化懇談会を終了いたします。長時間にわたりまして、ありがとうございました。



亀谷 亨 先生



黒萩 昌 先生



中野 誠二 先生



金石 潤導 先生



錦 秀見 教化委員長



伊藤 秀 学事教務委員長



寺澤 三郎 教化本部長



懇談会の様子